
ウィッチクラフト Ain Suph Aur

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウィッチクラフト A i n S u p h A u r

【Nコード】

N 6 8 3 8 W

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

幼い頃から不運に巻き込まれる体質の久住明弥は、受験の日、不良に絡まれ、水道管の爆発事故にも巻き込まれる。慌ただしい中、明弥を庇うように入ってきた岩崎勇氣は、明弥の「能力」は危険だと言い放ち……。現代日本を舞台にしたサイキックファンタジー。（ブログサイト掲載のものを加筆修正。軽度の残酷描写を含みます。重複投稿）

アイン A i n

生命の樹というものがある。

旧約聖書では楽園の中央に知恵の樹とともに植えられていたとされ、カバラにおける宇宙と人体を象徴する思想。

生命の樹は、10の球体と22の経で示される、クリスチャン・カバラで最も重点を置かれる象徴。その中で最も上には王冠を意味するケテルの球体が描かれる。

その更に上には全ての根源であるアインが存在する。

アインは「無」と示されることが多いが、それは人の言葉で表せるものでも概念で理解できるものでもない。すなわち神そのものを意味するとも言われている。

そのアインがケテルに近づくにつれ、人に理解しやすい存在となっていく。

アインのすぐ外側に、アイン・ソフ。その更に外側には最も、人の知性で捕らえやすい、アイン・ソフ・オウルがある。

生命の樹に登る人が、ケテルを越えアインに近付こうとした時に、最初に触れるのがそれだろう。

ある女は、そのことを「神の片鱗」と呼んだ。

触れれば全てのものが自然と一体になる超常能力、ウィッチクラフトに目覚めると言った。

無垢な彼女は信じた。

全てのものが神の力に目覚めることが本来あるべき姿なのだと。

自然と一体になりアインに帰ることこそが本来の姿なのだと。

その思想が何を生み出すのかを考えず、ただ理想だけを追い求めていた。

そして、
全ては彼女から始まった。

1 見える影は

バレンタインも当日ともなれば店頭に並ぶ商品も少し飽きたような色を見せ始める。平日と言うこともあってか、街中を歩く恋人達も学生が多い。バレンタインだからといって浮かれている人もそう多くは無かった。

久住明弥は人混みをかき分けながら待ち合わせたファストフードの店へと急ぐ。

今日は受験勉強の為の短縮授業だったが、ホームルームが長引いたために、約束の時間に遅れそうだったのだ。

中学生とはいえ携帯くらいは持っていた方が便利だな、と今更ながら実感した。

駅前通りの黄色い「M」の看板を見つけると、彼は少し走るようにファストフード店の中に飛び込んだ。

冷えたていた全身が急激に暖められメガネが曇る。少し暑いくらいだった。

いらっしやいませ、という店員に少し頭を下げて彼は店内をさがした。

「あっくん、こっち」

川上ともみが手を振って自分の位置を示した。

店内の客の何人かが一瞬興味を引かれたように振り返ったが、すぐにそれぞれの食事に戻った。

明弥はマフラーを外しながら彼女の向かい側の席に座った。

「ごめん、遅れちゃって。待った？」

「ううん、平気。時間びったりだよ」

彼女は時計を見ながら笑う。

相変わらず元気そうな様子に明弥はほっとして微笑んだ。

昔から変わらない大切な人だ。

彼女との関係を問われると正直言葉に詰まる。

幼なじみ。

その単語が一番しっくりくるだろうと思う。幼い頃は良く一緒に遊び回っていたし、今でも頻繁に会っているのだからそれが一番言い得ているようでもある。

勿論、彼女との関係を示すのはそれでは不十分なのは分かっている。けれど、それが一番的確に感じている。

トモミは上機嫌な笑みを浮かべながら綺麗な包みを差し出す。

「はい、これ。バレンタインのチョコレート」

「うん、ありがとう」

「今年は自信作だよ」

彼女は弾んだ声で言う。

トモミはそれほど料理が得意ではない。けれど、毎年バレンタインは手作りで用意してくれる。それが暖かくて嬉しい。

綺麗にラッピングされたチョコレートを仕舞うためにカバンを開くと、別のチョコレートが転がり出て床に落ちた。明弥は慌ててそれを拾い上げる。

「んん？ 今のも手作りっぽいけど？」

「どうだろ？ クラスの女子がくれたんだ。ノート貸したお礼にっ
て」

「ふーん？ 何か妬けるなー。あっくん優しいから女の子にもてそうだし」

口を尖らせて言うトモミの言葉を明弥は真っ赤になって否定する。

「え？ そんなこと、ないよ」

「そんなこと、あるんだよ。あーあ、私もあっくんと同じ学校だったら面白かったのに」

明弥はトモミに確認をするように問う。

「高校は、西ノ宮だよね？」

「うん、同じ高校。受ければ、の話だけど」

「トモちゃんなら大丈夫だよ」

言っていると彼女は声を立てて笑った。

「まーね。あつくんより、頭は悪いけど、運だけは良いから」

トモミは昔から運が良い。くじ引きで欲しい物を当てたり、遅刻覚悟で学校に行ったら先生が遅刻して結果的に間に合ったり。他にも小さな事であるが彼女がいいな、と思ったことは大抵実現してしまう。それだけの運を彼女は持っている。受験だって彼女が大丈夫だというとそうして実現してしまいそうだった。

「あつくんは頭良いから大丈夫だね？」

「そんなに頭いいってわけじゃ……」

言いかけた時、店内がざわついた。

トモミががたん、椅子を鳴らして立ち上がる。

明弥も振り向いた。

ガラス越しに見える大通りに何か火の手が見えた。ちょうどはす向かいに位置する店から黒い煙が上がっていた。

「火事！」

彼女が声を上げる。

明弥は少し寒気を覚えた。

「……ね、見に行ってみようよ」

「え？ トモちゃん？」

まるで何かに取り付かれたかのように、彼女は外へと走る。コート着ることもせずに片手で掴んだ状態で、彼女はそのまま外へと飛び出していった。

彼女が飲んでいたコーラの紙コップをゴミ箱へ捨て、明弥も彼女の後に続いた。

外は既に人だかりが出来ていた。

道を挟んでこちら側と、向かい側。それぞれに野次馬達が集まっている。ガードレールから身を乗り出すようにしてトモミはその黒煙を見つめた。

「……ねえ、あれ、連続放火事件のやつかな？」

「トモちゃん、あんまりそっちに行くとか危ないよ」

「怖い、まるで炎が生きているみたい」

彼女に、明弥の声は届いていないようだった。

その目には燃えさかる炎と黒煙しか映っていない。楽しんでる訳ではない。彼女にも自分にも火事に対してある思いがある。だから純粹に野次馬として見に来た訳ではないことを明弥は知っている。彼女がこだわる理由も理解出来る。

「トモ……」

彼女にもう一度呼びかけようとして、不意に、視線を感じた。

明弥は反射的にそちらを見た。

大通りの向こう側にたまっている野次馬の中に、見覚えのある姿を見つけて息を飲んだ。相手も、明弥を見て息を飲んだのがはっきりと分かった。

(……まさか)

四十前後の背の高い男だった。

男は躊躇うように視線を外した。が、すぐに彼の視線が戻される。

『危ない!』

誰かの叫びと、男の叫びが重なった。

はっとして明弥はトモミの腕を掴んで後ろに引っ張った。

車が目の前に接近する。

ぶつかった、と思った。

野次馬に向かって突っ込んできた車は、まるで明弥とトモミを狙ったように真っ直ぐ突き抜けてくる。

時間に見ればほんの一瞬だっただろう。明弥にはスローモーションの映像を見ているような感覚に見えた。

トモミだけでも助けようと思ったけれど間に合わない。そう判断したのは僅かの間。だが次の瞬間には明弥の目には予想していたのとは別の光景が見えた。

目の前に迫っていた車のボンネットがガードレールにぶつかるよりも前にひしゃげたのだ。

まるで見えない力で叩かれたように車とガードレールが大きく曲がる。

何かがぶつかり合う鈍い音と、タイヤの擦れる高い音。それが同時に聞こえた。

ぱり、と音を立てて車が不自然な形に曲がり、ガードレールの上に取り上げる形で静止した。

あと数センチ。

それでトモミと明弥は事故に巻き込まれていた。自分の目の前に曲がった車が見えた。何が起きたのだろうか。

判断しようとするが、頭が酷く混乱をしていた。

「び、ビクリした〜」

トモミの声で明弥は正気に戻る。

はっとして、彼女を見返した。

「トモちゃん、怪我はない？」

「うん、大丈夫。やっぱり私、運が良いんだね」

明るく笑う彼女に明弥はほっと胸をなで下ろす。

それも束の間、ぱたり、と地面に何かが落ちる音が聞こえて明弥はぎくりとした。一瞬、トモミが倒れたのかと思ったが、そうではなかった。明弥たちの真後ろで女の人が一人倒れていた。

明弥達の側にいた数人が驚いたように彼女を見たが、事故を起こした車と火事と彼女、どれを最優先すべきか迷ったような素振りを見せた。

近くにいた明弥が彼女に近寄った最初だった。

「だ、大丈夫ですか!？」

髪から靴下まで全身黒づくめの二十歳前後の女だった。

遠くで消防車が駆けつける音が聞こえた。

※ ※ ※ ※

男はバイクに跨り事故の様子を見ていた。

バイクも巨大であれば、跨る男も負けない巨漢だった。

髪は赤茶に染められ、眼光は鋭い。

まるで獣のような男だった。

「……目覚めた訳ではないだろう」

男はぼつりと言った。

低く唸るような声だ。

彼の手には携帯電話が握られていた。手も大きいために何も持っていないようにさえ見える。

「だが間違いはない」

彼はにっ、と笑った。

まるで得物を見つけたような残忍さを含む笑い。

「あれは、‘インパクト’だ」

2 それが彼の日常

店に入ると消火剤と色々なものが焼け焦げた匂いがした。

立ち入り禁止を示す黄色いテープをくぐって岩崎勇氣は店内を見回した。不審火の可能性が高い火事現場。中学の制服を着た少年が現場に入ってきたのを咎めないのは、すぐ側に刑事の姿があるからだろう。出火原因を調べている鑑識の男が一瞬怪訝そうに彼の方を見やったが、どうやら目撃者か店の関係者だと思われるらしい。

誰も彼のことを咎める者はなかった。

彼は周囲を見渡し嘆息する。

「確かに二件目と同じ気配が」

少年が言うと、背が高い刑事は頷いた。

目が細く、体格のいい彼は一見すると刑事と言うよりはヤクザの関係者のようにも見えてしまう。悪い顔つきではないのに、そう見えてしまうのは彼の眼光の鋭さにあるのだろう。

彼の名は伊東猛という。

まだ「若手」と呼ばれる刑事だったがその働きや感覚の鋭さはベテランの刑事とも肩を並べる程だと別の刑事から聞かされたことがある。少年もこの刑事が敏腕と呼ばれるのに相応しい人物であることを知っていた。

少年が伊東が評価に値する人物だと判断するのは、‘あの人’の部下を何年も続けているのだから。

「勇気」

呼ばれ少年は振り向いた。

警官にしてはラフな服装をした女が近付いてきた。何やら不機嫌そうだった。

そう、伊東はこの人の部下を長い間続けている。

勇氣は彼女を示す名を読んだ。

「母さん」

昨日もやはり家には戻っていないようだ。或いは勇気の眠っている間に出入りしたかと思ったが、彼女は出かける時に着ていた服ではなく、着替え用に持って言っている服を着ている。

彼女の外見は若い。勇気がむしろ大人びた外見をしているためか、親子というより姉弟に見えるだろう。だが確かに勇気を産んだのはこの女刑事だった。母親らしいところはあまり見あたらないけれど、それだけは確かな事だった。

眠たそうな顔で彼女は言った。

「学校は？」

勇気は苦笑した。

その横で伊東が吹き出した。

「その様子だと忘れていきますね。三年生は受験勉強のために短縮授業なんですよ」

「そうだったかしら？」

悪びれもしない彼女に伊東は皮肉の籠もった言葉を返す。

「家に戻る暇ありませんから忘れるのも無理ありませんが、あまり度が過ぎるとひねくれますよ」

それは勇気に対しても皮肉だ。

勇気は軽く男を睨んだ。母親も伊東を睨む。

そんなことで動じるようならば既に部署を変えてくれと嘆願書を提出しているだろう。さすがにこの破天荒と呼ばれる女刑事の部下を何年もやっているだけのことはある。彼は顔色一つ変えなかった。顔色を変えず、話を元に戻す。

「それで、これは？」

勇気はその質問に頷く。

「こっち側の事件だよ」

言うとも母親は興味があるのか無いのか分からない顔で言う。

「そう。……表の事故は見た？」

伊東が勇気の代わりに頷く。

「はい。愛さんが来る前に少し調べました。火事に気を取られた脇

見運転というのが見解ですが、奇妙な点が」

上司の名前を「愛さん」と親しげに呼ぶのは伊東が親密な関係にあるからではない。実際親子と懇意にしていたが、それが理由で彼女を名前で呼んでいるわけではない。彼女は苗字や役職名である「警部」と呼ばれるのが嫌いなのだ。

だからよほど改まった席でない限り、彼女はみんなにそう呼ばせている。

それで通ってしまうのだからおかしなものだ。

キャリアでもなく、女で、しかもこの若さで警部と呼ばれているのだから彼女の腕は確かだった。その実力が認められているからこそ彼女のわがままが通ってしまう。彼女を中傷する側から言わせれば「警察庁のお偉いさんの娘だから」ということだが、彼女はそれを一笑で吹き飛ばす。

何であれ、彼女の肝が据わっているのは確かなのだ。

「私も奇妙に思えるわ。あれだけ車がぐっちゃなのに、ガードレールはただ曲がっただけ。運転手が軽傷を負っただけ。奇跡よね。勇気は何か感じた？」

「ガードレールのこっちは悪意はなかった」

含みのありそうな言い方に愛は少し眉を跳ね上げた。

問うように見つめられ、勇気は続ける。

「見間違いかも知れない」

「いいわ」

「一瞬だけ運転手のこの辺りに赤黒い影が見えた」

彼は蟀谷を叩く。

勇気には人には見えないものが見える。気配や影と言った言葉で代用しているが、彼は人の纏うオーラというものや、幽霊や思念のようなものまで感じ取ることが出来る。その中で赤黒い影は「悪意」の事だ。

それは俄には信じがたい事であったが、伊東は彼の能力を信じていた。彼にはそれだけの実績があるのだ。見えていなければ説明の

付かないような事柄を彼は言い当て、それが幾度と無く捜査を助けているのだ。勘で言っているのであればそれもまた才能だろうとさえ思えるほどだ。

母親といい、息子といい、岩崎親子は不思議な親子だと思う。

伊東は問うように首を傾げた。

「それはどう判断すれば？」

勇気は首を振った。

「俺の見間違いかもしれないし、運転手は野次馬の中の誰かに対して明確な殺意があったのかも分からない。ただ、怪我人がない以上はただの事故だ」

「そうね。ともかく、この火事と事故は無関係なのね？」

母親の問いに勇気は頷く。

「その点を接点と考えるとしては薄すぎる。偶然同時期に起きたと思う方が正しいと思う。ただ、このところ多い気がするんだ」

「多い？」

「こういう類の事件が。全部が全部というわけじゃないけど、根本で繋がっている可能性を考えた方がいいかもしれない」

根本ね、と愛が呟く。

「忠告として受け取っておくわ。……ところで、今日は意地でも帰るから」

「伊東さんも？」

問うと伊東は頷く。

「はい、ご一緒させて頂きます。夕食は俺が作りますが何か食べたいものありますか？」

勇気に向けて問いかけられた言葉だったが、愛の方が先に答える。

「カレー、この間、CMでやっていたやつ」

ちらりと伊東が勇気を見る。

彼はそれでいいと頷いて見せた。

「八時くらいには帰れると思います」

「俺もそのくらいになると思う」

伊東は頷いてから外を示す。帰れ、と言ったのではなく車で送る
と言うような素振りだ。勇氣は首を振ってその申し出を断った。
火事の現場から外に出ると、冷たい風でぐんと身体が冷えた。
軽く身を縮め、寒さをこらえる。
目の前を車が通過した。

「……っ！」

勇氣は息を飲む。

赤黒い影が見えた。

車を運転する男に激しくまとわりつく赤黒い影。どこか血の匂い
の混じる呪詛の匂い。

人がいれば、悪意を生む。激しい悪意は影を生む。

だから、赤黒い影を見ることが消して少ない訳ではないのだ。

ほんの少しの人の感情の差で、普通の人でも見えてしまうことが
ある。

しかしあそこまで明確な影を見るのはあまり無かった。

喉の奥に酸っぱいものを感じる。

誰かに憎まれているのか、それとも憎んでいるのか。

激しい憎悪をまとわりつかせた車はそのまま青信号の交差点に向
かって走り抜ける。

こみ上げてくる吐き気に一瞬口元を押さえた。

（大丈夫）

大丈夫だ、と自分に言い聞かせる。

こんなものを全て気にしていたらきりが無い。分かっている。だ
から、気にしてはいけないものだ。

勇氣は背筋を正すと、車が走り抜けた方と反対側に向かって歩き
始めた。

喉の奥が酸で焼かれたように痛かった。

3 偶然でなければ運命

脳を働かせると糖分が欲しくなると言うのは本当の事らしい。

貰ったチョココレートを食べながら明弥は英語の問題集を相手に奮闘していた。英語の問題自体は難しいことはない。ただ、単語を覚え切れていないために苦勞するのだ。分かっているが、今は単語を覚えるよりも先に問題の傾向に慣れたかった。

トミから貰ったチョココレートの中に同梱されていた手作りのお守りを傍らに置いて彼は英文を読み始めた。

あの火事から三日が過ぎる。

明弥の脳にはもうあの火事と事故の記憶は薄らいでいた。幼い頃から何かと事故に巻き込まれやすい体質の明弥にしてみれば、自分が巻き込まれた訳ではない事故のことはニュースで見た事件とあまり変わらない。興奮して勉強が手に付かない程のことでもないのだ。どたどたと階段を上がってくる音が聞こえて明弥はペンを止めた。ノックもせずに突然ドアを開かれても彼は驚きもなかった。

「ノックぐらいしなよ、マサ」

振り向いて言うと言弟の政志は悪びれる様子もなく頭の後ろに手を回した。

今年の四月で小学校六年生になる政志はちょうどやんちゃ盛り年代だ。注意してもあまり効果ないが、明弥は根気よく続けることに決めた。

政志は少し口を尖らせて言う。

「兄ちゃんさー、そんなに勉強がんばらなくても良いだろう？」

「西ノ宮はそんなに楽じゃないんだよ」

「ランク落とせばいいのに。最近兄ちゃん勉強ばっかでつまんねーの」

言って政志はベッドに座る。

構ってほしいのか、と明弥は息を吐く。

確かにこのところ受験勉強ばかりであり政志と遊んでいない。受験が終わったら埋め合わせしようと思うけれど、それまでストレスを溜めさせてしまったら可哀想だとも思った。

兄弟には姉もいるのだが、少し年が離れているのと性別の関係もあって、政志は自分に良く懐いている。時々憎まれ口を叩くが、やっぱり甘えてくる弟は可愛いものなのだ。

「変更できないしね。それに西高じゃないと意味ないんだって」

「……トモミ姉ちゃん？」

政志は机の上のチョコレートを手につまみながら言う。

トモミが行くから自分もそこに決めたのか、と問いかけているらしい。からかい半分、ご不満半分と言うところか。

何を考えているのか想像がついて明弥は苦笑した。

「そんなんじゃないよ」

「べっつにいいけどね」

拗ねたような声。

トモミと政志、どっちが大切なのか、と問われているようだった。ご機嫌取りも大変だが、別に嫌でもないのだから厄介な所だ。

「映画」

「え？」

「春のアニメ祭り、俺の入試終わったら見に行くだろう？」

にへら、と政志の顔が緩んだ。

「兄ちゃんがどうしてもって言うならつき合うよ」

憎まれ口だが、緩んだ顔では憎さは感じられなくなってしまった。どうしても、と明弥は笑った。

「あ、そうだ、兄ちゃんミモリって女の人知ってる？」

「ミモリ？」

覚えが無い。

「知らないけど、その人がどうかした？」

「兄ちゃんに電話」

「こらこら、そう言うのは先に言えって」

「忘れてた」

べ、と舌を出す弟の頭を小突いて、明弥は一階の電話の所まで急いだ。

相手を随分待たせてしまったのではないだろうか。

階段の最後の数段を踏み外し、半ば滑り落ちるような形で一階に下り慌てて受話器を上げた。

「すみません、お待たせしました。明弥ですけど」

ばたばたした音を聞かれただろうか。

くすり、と笑うような声が受話器の向こう側から聞こえてきた。

『久住明弥さん?』

柔らかな女の人の声だった。

明弥は戸惑った。

「あ、はい……えっと……」

『私、ミモリユリコ、水の守る神祐の里の子で、水守祐里子と言います。この間救急車で運ばれた時、付き添って下さったそうで』

「え? あ、ああ……あれ、でも何で電話番号……」

『病院の方に聞きました』

「ああ、そうか」

明弥は思い出しながら呟いた。

三日前の事故の時に、明弥達のすぐ側で倒れた女の人だ。救急隊員が駆けつけた時に、たまたま側にいた明弥が姉弟と間違われて病院に付き添うことになったのだ。あの時確か、一応身元の確認のために名前と住所電話番号を書いた。

「えっと、その……目が覚めるまでいらなくて……大丈夫でしたか?」

『はい、おかげさまで』

よかった、と自然に言葉が漏れた。

電話の向こうの彼女はどこか微笑んでいるような声で言った。

『それで、お礼がしたくて電話したんですけど』

「あ、そんなこと気にしないで下さいよ。別にそんなつもりだった

訳じゃないですから」

『そう言うと思っていました』

彼女は当然というように言って続けた。

『でも、それでは私の気が済まないんです。だから、一度だけお助けします。』

「………はい？」

『あなたの声を聞いて確信しました。あなたは必ず私の助けが必要になる。ですからその時に。もちろん無料ですよ』

「あの、話が見えないんですが、水守さんは弁護士とか探偵とかの仕事をしているんですか？」

いいえ、と彼女は答える。

明弥は首を傾げた。

彼女の言っていることが全く分からない。

『いずれ、全て分かります。なら、少し謎の方が楽しいと思いませんか？』

「え？ あのこと……」

少しどころの謎ではない。

水守の話はどうも要領を得ないし、分かりにくい。助けが必要になるとはどういうことで、どうやって水守が助けるというのだろうか。

『出会ったのが偶然でなければ運命です。……それではいずれ、こちらから連絡をします。どうそ、お気を付けて』

「え、ちょっと！」

がちゃん、と一方的に電話が切れた。

受話器の向こう側からはツーツーという電子音しか聞こえてこない。

ひょっとして、少し特殊な思考の持ち主と関わってしまったのだろうか。別に嫌な感じのする人ではなかったが、正直戸惑ってしまう。

明弥は受話器を置いた。

考えても答えが出ないなら考えない方がいい。

からかわれたのならそれで良いし、そうでないのなら彼女の方からまた連絡をくれると言った。だったら考えるだけ無駄なことだ。

「……さて、勉強し直すかな」

彼はぐつと背伸びした。

こう言う時は、あまり気にしない性格で良かったと思う。

だが、言葉の裏に隠された意味をもう少し真剣に考えていればと、後々後悔することになる。その時の明弥には知る術もなかった。

4 思い出の匂い

男は小児病棟への入り口をくぐった。

190センチを軽く超える立派な体格の男の髪は赤い。肉体は鍛え抜かれ見る者を圧倒するほどの気迫を備えた男だ。目つきは鋭く、小児病棟はおろか病院に入っただけでも不審者と疑われそうな外見をしていたが、スタッフや長く入院している子供達はちらりと見やっただけで気にする者はいなかった。

皆、彼が見舞いの一人である事を知っているのだ。

「南条さん」

ナースセンターにいた若い女看護師が男の姿を認めて声をかける。彼はカウンターに備え付けられている見舞い受付用の紙を取り出しながら僅か表情を緩ませた。

「ああ、あんたか」

彼女は男を見上げて微笑んだ。

南条太一の身長は高い。看護師、木村早希の身長は低い方では無かったが、どうしても見上げる形になってしまう。

「いつもお疲れ様です。鈴ちゃんなら図書室の方ですよ」

「ああ、ありがとう。……それと、この間のチョコ旨かったよ」

早希は微笑む。

「良かった。南条さん甘いモノ苦手なんじゃないかって思ったんだけど」

「そんなことねーよ、俺、甘いモン結構好きだから」

そう言った彼の表情は優しい。

同僚達の中には彼の外見だけを見て怖がる子もいたが、早希はこの厳つい男に好意を持っていた。元々彼女の父親も彼のように大きい人だったからそう言う人に対して免疫があるのだろう。最初に見た時にはさすがに驚いたが、実際話をしてみて彼が優しい人であると分かった。妹想いで、ぞんざいな所はあるけれど、本性は人懐っ

こい犬のような人だ。

外見のせいで勘違いされて苦労してきたのではないかと早希は勝手に思っていた。

不意に男の手が彼女の頭に伸びる。

「え？」

突然髪を捕まれ彼女は動揺した。

太一は彼女の髪の一房を取り、キスをするように口元に押し当てた。

「ああ、やっぱりあんただ」

「え？」

「シャンプー、変えただろう」

ほんの僅か、彼の厚い唇に笑みのようなものが浮かぶ。

「え、あ、はい。良く分かりましたね」

早希は慌てて彼から離れる。

顔が、赤くなっていないだろうか。

「入ってきた時から花の匂いがしていたんだ。あんたの近くで一層強くなった」

「……嫌いですか？」

「いや、懐かしい匂いだ。俺の昔住んでいた庭の花の匂いがする。

俺は好きだ。あんたに似合っているよ」

さらりと言われてしまった。

遊び慣れている風でもありながら、自分だけに特別そうと言われているような気がして、早希は戸惑った。

こんな言われ方をされてしまえば勘違いしてしまう。

だが早希はこの南条太一が掛け値なしで本気で笑った所は見たことがない。微笑んだり、妹の鈴華に対しては目一杯の笑顔を見せるが、どこか無理をしているようでもあった。

だから余計に彼が気になる。

入院患者の兄、それ以上の感情を彼女は抱いていた。

こんな事を思ってもいけないとは思うが、鈴華のもう一人の兄が

見舞いに来るよりも、彼が見舞いに来る時の方が嬉しい。彼の事もっとよく知りたいと思う。

やはり恋をしているのだろう。

話を逸らすように早希は彼を見上げた。

「……な、南条さんってピアス片耳だけしかしてませんよね、何か理由があるんですか？」

尋ねると彼は左耳に触れた。

ループのピアスが僅かに揺れる。

「昔の名残だ。前はもつと沢山ついてたんだが」

「……女の人にあげたんじゃ」

ぶっ、と彼は吹き出す。

早希は真っ赤になった。

「あんた、博識だねえ」

「すみません、今の忘れて下さい」

「てつきりゲイとか言い出すかと思った。そうじゃないし、贈った女もない」

彼は笑いを堪えながら言った。

男の人が右だけにピアスをするのはゲイの証だという。彼の右耳にはピアスの存在はなく、それを疑った訳ではない。彼はそれを理解していた。そして、左耳だけにピアスをする意味も知っていた。知っていて敢えてそうするのは彼女など要らないと言う牽制だろうか。

それとも。

「あ、来てくれたの？」

呼びかけられて太一は振り向く。

「鈴華」

男の顔に今までとは違った優しい微笑みが浮かぶ。

どうあっても、妹には敵わない。

彼の妹は小学校五年生だ。身体が弱く入退院を繰り返している。同年代の子供よりも小柄で幼く見えるが、落ち着いた雰囲気は逆に

大人びても見せた。彼も、彼の兄もこの妹のことを溺愛しているように見える。早希にとっては患者の一人でしかないのだが、それでも彼女は礼儀正しく良い子だと思う。

彼女は図書室から借りてきたのか少し難しそうな本を抱えていた。太一はそれをまとめて片手で掴んだ。

「病室までお持ちします、お嬢様」

気取った彼の挨拶に鈴華はにこにここと笑う。

「何か変」

「そうか？」

「うん、変。……よね？」

彼女に振られて早希は吹き出す。

ふてくされたように太一は口をへの字に曲げた。

本当に良い子だ。病気で怖い思いも沢山しているのに、明るくて、不満や愚痴を漏らすことはない。良い子過ぎて逆に可哀想な位だ。

彼女に早く治って欲しいと思いつつも、ずっと入院していて欲しいと思う自分がいることに早希は辟易とした。

「誰か来ていたのか？」

太一は病室に向かいながら鈴華に問う。

彼女はうんと頷いた。

「クラスメートの男の子」

「最近、良く来るな。どんな奴だ？」

「優しくて良い子よ。少し太一くんに似ているの」

「俺に？」

太一は怪訝そうに彼女を見た。

彼女はくすくすと笑う。

こんな図体のかい小学生がいるのだろうか。確かに最近の子供は発育が良いと聞かすが、さすがにこんな威つい小学生がいたらさぞかし目立つ事だろう。

鈴華の事だから、何をどう捕らえて似ていると言ったのか分からない。

会ってみた方が手っ取り早いだろう。

「……太一君、腕のところ、どうしたの？」

「ああ、三日ほど前にちよつとな」

彼は安全ピンとビスで止めたジャケットの袖を見せながら言う。

「破けたから留めたんだが、変だったか？」

「そういう服に見えなくはないけど……買い換えたら？」

うーん、と太一は唸る。

「これ、気に入ってるんだよな。嬢が選んだ奴だし」

「今度、外泊許可とれたら買いに行きましょう。腕を組んだら痛そうなもの」

「ん、じゃあ、またお前が選んでくれよ」

笑顔で言うと、彼女はうんと笑って頷いた。

自分の腰程までしか身長のない少女の頭を撫で思う。

この少女が他の子供達のように自由に歩けるようになるのはいつだろうか。せめて自分の体力の半分くらい分けてあげられれば。

今はまだ何も出来ない。

（だがいつかは、きっと）

そのためには、手段を選ぶ必要はない。

優しいこの子は泣くだろう。

それでも、この子の為なら何だって出来る。

何だって。

5 入試

バレンタインに貰ったトモミのお守りは案外と良く利いた。

午前中の試験は思っていたよりも上出来だった。

午後も続く試験に備えてトイレを済ませた明弥は手を綺麗に洗ってからポケットからお守りを出した。ピンク色の布を袋状に縫い合わせて「合格!」という刺繍が入っている。所々ほつれているが、それがまた嬉しかった。

不器用なトモミが、一生懸命作ってくれたものだ。

嬉しくって、頬が緩む。

「あ、ごめんなさい」

入ってきた男子生徒にぶつかり明弥は慌てて謝る。

制服を見てぎくりとした。

他校の、生徒だ。

受験生だというのに妙にガラが悪い。制服を着崩して、靴も中途半端に履いている。リーダーとおぼしき人物の後ろに、二人見えた。本当に西ノ宮の受験生なのだろうか。

「何だ、お前、にやけて気持ち悪いな」

「すみません、通して下さい」

明弥はぐっと表情を引き締める。

本能的に絡まれると思った。

入学試験に来ているのだから揉め事は起こしたくない。

「お前達、何か聞こえたか？」

リーダー格が言う。

にやにやと笑って後ろの男たちが首を振った。

(まずいな……やっぱり絡まれたか)

こういう連中に絡まれる事は良くある。だから絡まれること自体

は慣れていたがやり過ごすことに慣れている訳ではない。

自分は昔から運が悪いのだ。

事故や事件もそうだが、他人より巻き込まれる率が高いだけで、今もまだ五体満足に機能しているのだから別に不幸だとは思わないが、何もこんな時まで絡まれることはないじゃないかと少し嘆いた。人生を左右する大事な試験なのに。

明弥はぐっとお守りを握った。

後ろに控えた一人がそれに気付く。

「こいつ、何か持っているぜ。……何だこの不格好なお守りは」

「ちよっ……返して下さい!」

「ゴミだろ? ゴミはゴミ箱に捨ててやれよ」

お守りが、取り返そうとして伸ばされた明弥の手をすり抜けてりーダーの手に渡る。

「汚物だろ、だったら便器の方がいいんじゃないの?」

「まっ……」

後ろから二人に捕まれた。

目の前で見せつけるようにトモミのお守りが揺れる。

お守りが、小便器の中へ、放り込まれる。

トモミの気持ちちが。

踏みにじられる。

彼女なら笑って、むしろ明弥の事を心配してくれる。だけど、

(嫌だっ)

止めてくれ。

声は、言葉にすらならなかった。

腹の奥底から、何かがせり上がるように出てきた。

それだけは、嫌だ。

「っ!!」

叫んだ。

声にならない声で。

刹那。

「!？」

ドン、と何かが衝突したような、破裂したような音が響く。大きく揺さぶられて男たちと共に明弥はトイレの床にしゃがみ込んだ。全身が水浸しになるのを感じる。トイレの水道管から水が止めどなく噴き出していた。

破裂したのだ、と明弥は悟る。

「……………ってえ」

明弥を掴んでいたうちの一人が頭を押さえて蹲った。

「……………」

何が、起こったのだろうか。

ジリリリリ、と激しい警報の音が鳴り響く。

水に流され、トモミの作ったお守りが明弥の手元まで流れて来る。

明弥はそれをぐっと握り込んだ。

「お前達、何をしたんだ！」

咎めるように叫んで入ってきた教師が、その惨状を見て絶句する。

水道管の破裂したトイレの中は水浸しになりその中に四人の男子

生徒達が蹲っている。

何が起こったのか、現場に居合わせた本人達すら分からない。

後から来た教師達もまたどうして良いのか判らない様子だった。

元栓を止めてきます、と誰か一人が管理部屋へと走っていった。

やがて、吹き出す水は弱まった。

「お前達、一体何を……………」

「そいつが！ そいつが何かしたんだ！」

リーダーが明弥を指差して叫ぶ。

「そいつが何か叫んだ瞬間にこうなったんだ！ 何かしたならそい

つが……………」

「無関係だと思いますよ」

冷静な声が聞こえた。

明弥は視線を上げる。

「今日は寒気が凄いらしいですから、水道管が凍って破裂したんでしょう。この辺じゃあまり無いですけど、長野とか寒い地域の方では時々あるようですから」

彼も受験生だろうか。

トモミと同じ学校の制服を着た男子だった。

落ち着きすぎている判断に教師が戸惑ったような声を上げる。

「君は……」

「岩崎勇気。受験生です」

戸惑う教師の後ろでもう一人が「警察庁の」と耳打ちをした。一瞬驚いた素振りを見せたが思い当たった所があるのか、納得したように頷いた。

岩崎は水浸しのトイレの中に足を踏み入れ、なおも喚き散らすリーダー格の男の横に屈んで何やら耳打ちをした。

蒼白になり、男は喚くのを止める。

何を言ったのだろうか。

訝っていると、いつの間にか入ってきた教師達に立つように促されタオルを渡された。タオルの暖かさに、ようやくからだだが冷え切っている事に気付く。

春に近いとはいえ、先刻岩崎の言った通り、今日は寒気が襲っている。その中で水浸しになったのだ。

とてつもなく寒かった。

ガタガタと震え出す明弥を見て、誰かが「保健室へ」と言う。

「俺が付きます」

「ああ、じゃあ岩崎君、頼むよ」

「はい」

明弥の見えないところで何か会話が交わされ、震える彼の肩を誰かが抱いた。恐らく岩崎だろう。彼に促されるままに歩きながら明弥は大勢の人に見られている気配を感じていた。

がやがやと騒がしい。

教室に戻れ、と教師達の声に混じって、あの人格好良い、と呟く

女子の声が聞こえる。

明弥は岩崎を見上げた。

確かに端正な顔立ちをしている。

「お前」

岩崎の目が明弥を睨む。

「自分が、何したか分かっているのか？」

「……え？」

意味が分からず問い返すと彼は小さく舌打ちをする。

「分からないフリか、それとも本当に知らないのか。どっちにしたって自覚した方がいい。お前のそれは危険だ」

「え…？ それって？」

遮るようにながら、と音が響く。

暖かい空気と保健室の匂いがした。

保険医らしい女がどうしたの、と驚いたように声を上げた。岩崎が何かを説明して、ストーブの側に明弥を座らせる。明弥の身体の震えが強くなった。ストーブの熱気で身体の冷えがますます強調されたのだろうか。

彼が落ち着き、身体の震えも止まる頃、岩崎の姿は保健室には無かった。

代わりに先刻の三人組が明弥同様に震えていた。

6 赤毛の獣

「映画、アニメじゃなくても良かったの？」

「うん、洋画が見たかったんだ」

政志は大切そうに映画のパンフレットの入った袋を撫でた。

映画はアクションもコメディもなく、小学生が見るにはつまらないような内容だと思えたが感動系の作品でそれなりに面白かった。政志は字幕を追うのがやつとといった様子だったが、それなりに満足したようだ。

普段はアニメばかり見ているが、背伸びをしたいのだろう。明弥にも経験があるから少し微笑ましく思えた。

見終わった後、マクドナルドにでも行く予定だったが、政志の要望でカフェに入った。

白い椅子とテーブルに、青緑色のパラソルが差されたテラスがあるカフェだった。

春の暖かな日差しの落ちるテラスで暖かい飲み物を注文する。これで、隣のビルが工事中でなければ風景も良かっただろう。

「……にが」

飲み物を口にして政志が表情を歪める。

「ほら、やっぱコーヒーよりこっちの方が良かっただろう？」

言って明弥はホットココアを政志の前に差し出す。

渋い顔で彼は受け取った。

「ごめん」

また意地を張ったような言葉が返ってくるだろうと予測していた明弥は思わぬ素直な態度に目を丸くした。

「……やっぱ兄ちゃんみたいになれないよな」

「ん？ 何か言った？」

「何でもない。それより、高校合格オメデトウゴザイマス」

「うん、ありがとう」

試験の後、風邪で寝込むことになったが、入試はともに受けられたし、出来も良かった。おかげで明弥は高校合格を果たした。トモミもどうやら合格したようだ。これで春からは二人揃って西ノ宮高校の生徒になるのだ。

クラスは同じになるとは限らないけれど、トモミと同じ学校に通えるのは少し嬉しかった。楽しい三年間になるだろう。

「んー、だけどプレッシャーだなあ」

「何が？」

「俺も西ノ宮行けてお母さんに言われそうだし」

確かにそれは言われそうだ。

「政志は、政志の行きたいところに行けば良いんだよ。奈津姉だって散々揉めて女子校に行ったんだし。状況違うの確かだけどね、無理をする事はないんだよ」

「行きたいところが特にないから迷うんだよ」

「進路決めるのはまだ先なんだしゆっくり悩めばいいよ」

明弥は取り替えたコーヒーを口にする。

政志は複雑そうな顔をする。

「そんな頃は兄ちゃんだって……」

きらり、と何かが煌めいた。

工事中のビルの屋上。

訝しんで顔を上げた瞬間、彼の意識は遠のいた。

ほんの僅か彼の記憶が飛ぶ。

何も分らない。

気が付くと明弥の目の前には鉄筋が突き刺さっていた。破壊されたカフェのテーブルや椅子が、辺りに散乱している。

ざわざわと周囲がざわめいた。

「？」

「……兄ちゃん」

怯えたような、か細い政志の声が腕の中から聞こえてきた。

ちょうど弟を抱きかかえるようにして明弥は鉄筋を見ていた。先刻まで手にあったはずのコーヒーはもう手元がない。

何が起こったのか理解できなかった。

状況すら分からない。

「今……何が……」

周囲の人の言葉でビルの屋上から鉄筋が落ちてきたことに気が付く。

それはまるで明弥たちを狙うように彼らのいた場所に落ちてきたのだ。怪我はないのか、と問いかける男の質問にようやく自分が間一髪のところまで政志を連れて逃げたことが想像できた。

一瞬の記憶が全く無かった。

けれど、確かに今明弥は政志を抱きしめて壊れたテーブルから離れて座り込んでいるのだ。どう行動したのか全く覚えていないけど、助けなければ、と思ったのだけは強く感じていた。

ぐちゃぐちゃになったテーブルを囲んで人々が口々に何かを言っている。衝撃が強かったのか隣のテーブルにいた人達も何人か飛ばされて倒れていた。

「政志、怪我は？」

「ない……けど、兄ちゃん、今……」

「大丈夫、何も心配するな」

怯えた声を上げる政志に明弥は優しく言う。

こういった事故に巻き込まれることは良くあった。大抵一人でいる時に、上からものが落ちてきたり、通り魔に襲われたり。明弥にとっては小さい頃から幾度と無く遇っていることだから珍しい事ではないのだ。

けれど、政志にとっては大事だ。

あのままあの場にいたのなら、二人とも命はなかったのだ。

バレンタインの日に起こった事故を思い出す。

あの時も何事も無かったが、トモミが近くにいた。

自分がいくらこんな事故に巻き込まれても構わない。けれど、誰

かが一緒にいる時、誰かを巻き込むような事故になってしまったら、この巻き込まれやすい体質が呪わしい。

そう言えば岩崎は言わなかっただろうか。

明弥のそれは危険だから、自覚した方がいいと。

それは、このことを言っているのだろうか。

（危険を、引き寄せる体質……？）

がん、と鉄筋が鳴った。

また何か上から降ってきたのだろうか。

思った瞬間、明弥は凍り付いた。

周囲から耳を劈くような悲鳴が上がる。

「っ……！！」

政志が身をよじって明弥の首に巻き付いた。

獣が、いた。

巨大な犬のような生き物。

犬ではないと思ったのは大型犬を軽く超える大きさと、その毛並みが赤銅色をしていたからだ。

まるで。

まるで、赤毛の狼。

ぐるる、と狼が唸る。

明弥を見つめ、まるで獲物を見つけたかのように。

「……政志、逃げるんだ」

「……で、でも、兄ちゃん……」

身体が震える。

だけど、政志だけでも守らなければ。

「いいから、逃げるんだ。あいつは、多分、俺を狙っているから」
「え……」

戸惑った政志の声。

どん、と彼を人混みの方に押しやって、真逆の方向に明弥は走り出した。それを避けるように人混みが割れる。

危険を引き寄せる体質。

ならば、あの赤毛の狼も自分を追ってくる。

その、予測は正しかった。

赤毛の狼はものすごいスピードで明弥の背中に飛びかかった。

「……っ!!」

はじき飛ばされるようにして押し倒される。

見えたのは、鋭い牙と、犬とは思えない刃物のような爪だった。

7 狼の爪

死ぬ。

そう思った。

目を閉じている暇さえなかった。

刃物のような爪が顔面に向けて振り下ろされそうになっていた。

「……!？」

だが、その爪は一向に明弥の顔面に落ちてこなかった。

赤毛の狼は、まるで襲うか否かを葛藤しているように悲痛な呻り声を上げている。その姿が、まるで人のようなシルエットを帯びて見えた。

犬のような形のはずなのに、四つん這いになった人のような形が見える。

一瞬だった。

けれど、確かに赤毛の獣の顔が、人の顔に見えた。

苦しむような、男の顔。

（……何？）

がつん、と音がして不意に身体に掛かっていた重みが消える。

「怪我はないか！」

男に助け起こされ、明弥は椅子で殴られた様子の赤い狼の姿を見た。

明弥は顔を上げて男の方を見る。

四十代後半くらいの目つきの鋭い男だった。格闘技の心得のある人だろうか。スーツを着ていたが、その上からでも男の筋肉が感じ取れた。

「君は、早く逃げなさい」

「だけど……」

「若い子が、こんなところで命を落とすもじゃない。おじさんは警官だ。少しはこういうのにも慣れている」

男は冷静そうに言った。

先刻、自分が政志に取ったのと同じ態度。

だから分かる。

こんな事に、慣れている人なんていない。

狼が起きあがった。

意識をはっきりさせようと首を振っている。

「逃げなさい」

明弥は首を振った。

駄目だ。

あれは、どんなに逃げたって明弥を襲ってくる。

今ここで、この刑事さんに対処を任せたとしても、変わらないだろう。犠牲者を出すなら、自分だけでいい。

「……狙いは、僕だ」

「……何？」

男が聞き返す。

瞬間、狼が跳ねた。

明弥は警官を押しやって跳ねた下方をくぐり抜けるように狼に向かって走った。いままで明弥のいた場所に爪をめり込ませた狼は踵を返し、再び明弥の方に向かって走り出す。

落ちていたパラソルの柄を掴んだ。

重く、持ち上げるのがやっとだったがそれを何とか引き上げると、遠心力で大きく振れた。青緑色の傘の部分が狼を巻き込み、パラソル自体の重さで横に飛ばされた。

遠巻きで見ていた群衆から歓声のようなものが上がる。

（まだだ）

明弥は急いで人の少ない方に向かって走り出した。

まだ、狼が気絶したわけではないだろう。

多分再び起きあがって自分の方に襲いかかってくる。

兄ちゃん、と遠くから政志の声が聞こえる。

君、と呼び止める警官の声が聞こえる。

どちらも無視して明弥は走った。

振り向かず、狼も走り出したのが分かった。

足の速さではいつも後ろから数えられる所にいる明弥だ。動物の足の方がずっと早い。追いつかれるのは一瞬だろう。

だけど、少しでも人から離れたかった。

明弥の進行方向の道に、車が止まった。

車の後部座席のドアが開かれ、中から見知らぬ男が叫ぶ。

「乗りなさい！」

本当は乗るつもりなど無かった。

乗れば車の人に迷惑がかかる。

だが、明弥は見えない力に押された。まるで引き込まれるように、転がり込むように車に飛び乗った。

ドアが半開きのまま車が発進する。

獣が追ってきていた。

「坂上、人気のない方向へ」

「心得ております」

運転手が答えた。

明弥は自分を招き入れた男を見る。

微笑を浮かべた、穏和で落ち着いた感じの男だった。二十代から四十代、どの年代にも見える不思議な男。

「あのっ」

声をかけると男は頷く。

「大丈夫、分かっています」

何を分かっていると言うのだろうか。

有無を言わせないような笑顔で言われてしまえば黙るより他が無かった。

猛スピードで走る車のバックミラーに、赤い影が映る。

明弥は振り返って確認する。

「追いかけてくる」

「気に入られましたね」

男は楽しげに言う。

明弥は男を見返した。

「あなたは、狙われています。人から離れるという判断は賢明でした。おかげで彼を人から離す事ができます」

彼、と小さく呟く。

まるで狼が人であるような言い方だ。

確かに明弥は一瞬、あの狼が人間の男のように見えた。だが、狼男でもあるまいし、本当にそんなことがあるのだろうか。

「あなたは、あの狼が何なのか知っているんですか？」

問うと男は笑顔を崩さず答える。

「はい、知っています」

「一体あれは……」

「説明は後にしましょう。今は、我々は対処する術を知っているとだけ申し上げておきます。大丈夫、何も心配することはありませんよ」

心配することはないと言われても安心出来るわけがない。

明弥は車の速度計を見る。それはもう既に100キロのスピードを超している。なのに、後ろを追いかけてくる赤い姿は消えない。

男はバックミラー越しにその姿を見つめながら落ち着き払った様子で腕組みをしている。

彼は高級そうなスーツを着ていた。坂上と呼ばれた運転手の着ている服も安そうには見えない。車種は分からないが、内装を見る分には車も随分と高そうだ。

この人達は一切何者なのだろうか。

あの狼の対処の方法を知っていると言ったが、一体どんな関係があるのだろうか。

普通、街の中に獣がいたとして考えるのは熊や狸のように山から下りてきたか、あるいは動物園から逃げ出したか。

どう考えてもこの人達は動物園の関係者には見えない。むしろ、禁止されている動物を密輸しているような人達に見える。まるで逃げ出した商品を捕獲しようとしているような。

（密輸？）

明弥は自分の考えに違和感を覚えた。

仮に彼らが密輸をしているとして、商品である動物を「彼」と呼ぶだろうか。それに、逃げ出したものを捕獲するのに、あんな風に目立つ行動を取るだろうか。

分からない。

けれど、この人達は、人を巻き込まないように遠くに逃げようとしている。

明弥を助けようとしてくれている。

悪い人たちのようには思えなかった。

「！」

どん、と何かが車の上部に落ちてきたような音が響く。

ぎしりと車体が軋んだ音を立てた。

8 疑問

呆然と、彼は立ちつくした。

兄が犬に襲われて拳げ句見知らぬ車に連れ去られた。どうすればいいのか解らず政志は車の去った方向を見つめていた。

「君は先刻の少年の知り合いですか」

男に話しかけられ、政志は頷く。

明弥が獣に襲われている中、助けてくれた男だ。彼は事態の收拾しようとカフェの人間などに指示を出していた。どこかに電話を掛けている様子だったが、格好や口ぶりから察するに、刑事なのだろうと政志は思った。

案の定、男は警察手帳を示した。刑事ドラマで見るような手帳と少し違った。彼は中津龍二と名乗る。手帳にも彼の写真と名乗った通りの名前があった。

少し警戒心を減らして政志は答える。

「……弟です」

「名前は？」

「久住政志。兄の名前は明弥です」

彼は満足そうに頷いて次々と色んな質問をした、問われるままに政志は答えていく。その都度確認を取りながら男は手帳に書き込んでいった。

本物の刑事もこうして手帳とかに書き込むんだな、とぼんやりと眺める。

不意に、涙がこぼれた。

「……っ」

手の甲で涙を拭った。

今は、泣いている場合でもないのに。明弥の為にも今は刑事の質問に答えてすぐに探せるようにしてもらわなきゃいけないのに。

そう思う程に涙が溢れる。

押しつぶされそうなほど不安だった。

兄が側にいないことがこんなにも不安だとは思っていなかった。

「ちよっと、中津くん！ 男の子泣かせてどうするのよっ！ 重要参考人だからって尋問していいって思っちゃだめよ！」

声を聞いて政志は顔を上げる。

近付いて来たのは綺麗な人だった。綺麗だけれど、女性の服装をしているけれど政志にはそれが男にしか見えなかった。声もやや野太いものが混じっている。

中津は軽く顔をしかめた。

「仕事をする時はきちんとした格好を……」

「非番中に呼び出されたよ。文句言うなら所長に言って頂戴。……」

大丈夫？ あのおじさん怖いからね、驚いたでしょう？」

綺麗な男の人は政志の前に膝を付いて微笑む。

香水だろうか。男の人にはない優しい匂いがした。

「政志くん、ね？ これ、大切なものなんじゃないの？」

オカマは政志の前に袋を差し出した。

映画の、パンフレットが入っている袋だ。

明弥より大切なものではないが、大切なものだ。大事そうに持ってきてくれたのをみて何故か不安が少し和らいだ。

まるで、今一瞬明弥が戻ってきたかのようにだった。警察は当てにならないと大人はよく話をしていたけれど、この人なら信用出来る気がした。

政志は彼に抱きついた。

「あらあら、可愛いわね。……大丈夫、お兄さんは私たちが責任持って見つけるからね。心配しなくて良いわ」
「……うん」

※ ※ ※

車の上部が何か硬いモノで殴られているかのようにガンガンと音が鳴り響いた。道行く車がほとんど脇に避けていくのが見えた。

あの獣が今屋根の上に乗っているのだ。

明弥は頭を軽く押さえ、音と衝撃に耐えた。

男は少し身乗り出し、運転席に座る男に指示をする。

「坂上、ここではないけません。振り落として下さい」

「承知しました。揺れますのでご注意を」

運転士は頷きアクセルを踏む。

同時に車が左右に大きく振れた。

車の通りの多い場所だというのに、車は構わず加速する。反対車線に乗り出し、車の往來を妨げながら車通りの少ない山の方へと走っていく。どこからかサイレンの音が聞こえる。

一瞬、笑顔の男が少し顔をしかめたのが解った。

がん、と激しい音がして車の天井から手が生えた。

「うわっ……!!」

「……」

明弥は悲鳴を上げたが、男は動揺した様子を見せずに懷に手を入れる。

引き出されたものは拳銃だった。否、拳銃と言うよりも形はタンクの付いた小型の水鉄砲というところか。モデルガンの銃身にガラスタンクを取り付けたような造りをしている。ガラスタンクの中には赤いインクのような液体が入っている。

血のようだ、と明弥は思う。

彼はそれを獣の手に密着させて引き金を引く。

しゅっ、と空気を切るような音。

赤いインクが一気に無くなった。

獣がうめき声を上げた。

「な……?」

明弥が声を上げると、彼は片手でタンクを捻る。

「一撃では無理ですか。やはり丈夫ですね。坂上」

彼は何かを催促するように運転席の方に手を出す。

坂上と呼ばれた男が運転をしながら助手席にあるアタッシュケースを開くと、新しいガラスタンクを取り出し、彼に渡した。

「あの、何を……」

男は答えずに窓を開いた。

開いた瞬間息が出来ない様な突風が車内になだれ込んでくる。

彼は身を乗り出し窓枠に腰を下ろした。

先刻のような風を切る音と、獣の呻り声。

車内に入ってきた彼の手がもう一度坂上に催促する。坂上は先刻よりも少し薄い色の赤い液の入ったタンクを渡す。再び同じ音が聞こえた。やがて音と揺れを生じさせながら獣がゴロゴロと道路を転がっていくのが見えた。

明弥は視線でそれを追った。

「！」

車が急停止する。

その勢いで明弥は助手席のシートに鼻先をぶつけた。

「降りて下さい」

「あ、はい」

男に言われ明弥はそれに従った。

車の外にはタイヤが滑った跡と血痕のような跡が残されていた。そしてその先には、

「っ……！」

明弥は息を飲む。

転がっていったはずの獣の姿が無かった。代わりに、傷だらけで全裸の大男の姿。顔こそ見えないがその身体は紛れもなく人間のものであった。彼の腕から血が流れていた。

意識が無いのだろう。男はその傷を手で覆うことすらしなかった。

「……まさか、死んで……」

「生きていますよ。ただ、良く利く麻酔のようなものを打ち込んだだけです」

（ようなもの？）

明弥は眉を顰めた。

と言うことは麻酔では無いのだろうか。

いや、そもそもこの男は誰で、あの獣と何の関係があるのだろうか。これでは獣が男に変身したようにしか見えない。

そんなことが、あるのだろうか。

運転士が車から毛布の様な布を持ってきて大男の上に掛ける。

明弥は男を見上げた。

微笑んでいる顔の男の表情が僅か困ったような、悲しそうな色を帯びる。

「彼は私の弟なんですよ」

「え？」

「人狼です」

「ジンロウ？」

「狼男、と言うのが解りやすいでしょうね。月の満ち欠けに左右される訳ではありませんが」

確かにこの状況を説明するのに、男が狼男だったと言われるのが一番しっくりくる。だが、俄には信じがたい。常識しか信じられないわけではないが、そんなのは都市伝説で現実にいるなんてとても思えない。

自分が芸能人であれば大がかりなどつきりを仕組まれたかと思うだろう。

それに、男が人狼ということは兄弟である彼も人狼だと言うのだろうか。赤い髪の子はともかく、この細身の男が狼になる姿は想像が付かない。

「彼は特殊な病気なんです。今、この状態で警察に捕まればもう二度と会うことは出来ないでしょう」

明弥が言葉を理解するよりも、視線が交わるのが先だった。

今まで殆ど開かれていなかった男の瞳が明弥の瞳を捕らえた。

「今のこと、見なかったことにしてもらえませんか？」

9 理由と秘密

久住明弥が発見されたのは繁華街から離れたバスの停留所だった。待合室のベンチにもたれ掛かって気を失っているところを警察官が発見したという。

マスコミが狼か野犬かと騒ぎ立てる中、その獣に襲われた少年は病院に運び込まれた。どこからかぎつけたのか報道関係の記者達が渦中の少年にインタビューを取ろうと院内をうろついていたが彼の病室に辿り着くことは無かった。

「小児病棟か。中津さんの指示だろ。さすがだな」

勇気は病院のロビーで紙コップのコーヒーを飲みながらほっとしたように息を吐いた。

まだ人の多い待合室のテレビの中では街に突然現れた獣に付いての報道がされていた。さすがに獣の姿のVTRは無かったが目撃者の証言から作ったイラストやイメージ映像が流されていた。一部の報道では監視カメラの映像が流れていたが、あまり鮮明とはいえなかった。

「そうですね、マスコミもこちらには入りにくいですからね」

並べられた長椅子に腰を下ろしながら伊東が同意するように頷いてみせた。

彼を小児病棟の方に入れろと言ったのは中津刑事だった。ちょうど現場に立ち合った彼はこれが普通に野犬や狼に襲われただけの事件ではないと感づいたのだろう。報道管制を強いるにはまだ情報足りないが、久住明弥をマスコミに晒すのは得策ではないと判断したのだ。彼が発見されたという報せを受けて真っ先にそう指示を出した。

患者も見舞客も様々な一般病棟よりも小児病棟の方が外からの侵入者に敏感だ。特にここは原則的に身内か入院患者の学校関係者と一緒でなければ中に入れない仕組みになっている。近年増えてきた

不審者の侵入が原因で出来たシステムだがこんなところで役立つとはまさか思ってもみなかった。

勇気の母親の愛には「頭が鉛で出来ている」と言われるような刑事事だったが、その点はさすがに判断が速い。

「勇気くんは彼と面識があるんでしたよね」

勇気は頷く。

「入試の時の一度きりだけど」

「印象は？」

「大人しくて、トロそうで、真面目。いじめやカツアゲの被害者になりそうなタイプ」

率直に言うとは伊東は軽く吹き出した。

彼は少し不機嫌に伊東を睨んだ。

「伊東さんも似たような感想なんだろう？」

「ええ、確かに概ねはそうですね……」

「けど？」

「いじめの部分だけは同意できませんね。彼はいじめられるタイプじゃありません」

勇気は眉をひそめる。

ぱっと顔を見ればイジメの対象に成り得るか否かはすぐにわかるだろう。久住明弥は明らかに前者だ。勇気に久住明弥をいじめたいという衝動はないが、イジメる側の人間は目を付けるだろう。現に既に入試の時に絡まれている。

だが、伊東に「いじめられない」と断言されると奇妙な気がした。「理由は？」

「色々ありますが、一番は彼をいじめてもつまらないと言うことですよ。話してみれば解りますが、どうします？」

勇気は警察の協力者であるものの、関係者ではない。事件関連の捜査目的ではなく友人として彼と会うか否かを問われているのだ。少し迷ったが勇気は首を振る。

どうせ彼とは四月から嫌でも顔を合わせることになる。先刻もそ

の理由から彼と会うのを止めると決めただけだ。

「やめとく」

「そうですか」

彼は頷いてコーヒーを飲んだ。

伊東はまだ中学生の勇気に対しても丁寧な言葉を使う。刑事という職業柄、誰に対しても丁寧な言葉を使う癖のようなものが付いているのだ。勇気が上司の息子だから特別というわけではない。

勇気が伊東に対してぞんざいな口を聞くのは幼い頃から見知った間柄だからだろう。年上の刑事に対してのしゃべり方ではないと思っていたが、今更口調を改めるのも他人行儀な気がして嫌だった。咎められれば治す努力はするが、伊東自身が気にしていないのだから今は必要ないだろうと思う。

「それよりも伊東さん、彼について詳しく調べた方がいい」

「では今回の件、無関係ではないと？」

「入試時のこともあるから、無関係とは言いにくい。……それに、途中から記憶がないなんて、とても信じられない」

突然獣が襲ってきた。彼が偶然あの場所に居合わせたただけだとしても、車に連れ去られてから発見されるまでの間の記憶が無いなんて言われて納得が出来るはずがない。今は記憶が混乱して思い出せないとしても、車に乗り込んで、気が付いたら病院にいたという証言はお粗末すぎる。

その間に何かあり、それを隠しているとしたか思えなかった。

おそらく警察に知られるとまずい事情がある。

それが「こんな話を話しても、信じてもらえないだろうし、頭がおかしいのかと疑われる」という事情ならいい。だがもし車の人物を庇う行為なら、彼自身が何か法に触れる様なことをして言い出せないのならば問題は変わる。

入試の時に感じたように彼の能力が勇気の思っている通りなら、自覚していてもしていなくても厄介なことに変わらない。

この世界は人の持つ特殊な力に関してあまりにも無知なのだ。

勇気は自分自身がそう言った能力を持っているために、この世界に科学で証明されていない超常能力というものが存在を知っている。

その勇気から見ても、彼の存在は異質だった。

このところ頻発している「その類」の事件にも彼が関連している可能性もある。初めから全て疑って掛かるわけではないが、可能性がある以上彼のことをこのまま放置してはいけないと思った。

「解りました。調べてみましょう」

伊東はそう言って手を出した。

勇気は空になった紙コップを伊東に渡す。

「俺も爺さんに色々聞いてみる。俺より詳しいから」

「お願いします。アパートまで送りますよ。どちらにしても、愛さんの荷物を届けなきゃいけませんし」

うん、と勇気は頷く。

がやがやとロビーが騒がしくなったのはその時だった。

救急を知らせるサイレンを鳴らし、病院の前に救急車が飛び込んできく。救急隊員が通路を確保し、なだれ込むように次々とストレッチャーで患者が運び込まれて来る。

伊東は視線だけで何が起こったのかを聞いてくると合図を送った。それに頷いて見送る。

不意に酷く嫌な感じがした。

叫ぶように医師に容態を伝える救急隊員の声の中に、火事という単語と十三人という言葉が混じる。勇気は慌てて待合室のテレビに視線を向ける。

先刻まで謎の獣に関して報道していた番組は緊急報道に切り替わっている。

大規模な爆発事故が起こったと、テレビで報道されている。

それはこの病院からさして遠くない距離。運び込まれた患者が爆発事故に巻き込まれた人達であると嫌でも解る。

タイミングが、良すぎる。

（これじゃあ、まるで……）

まるで、久住明弥が関連したこの件を報道させないようにするために爆発事故が起きたかのような。犠牲者が久住明弥だけの事件と、犠牲者が十人を超えた爆発事故ならば、報道は間違いなくこちらの事件を報道したがるだろう。

（誰かが）

久住明弥を助けたという車の人物か、現れた獣に関連している人物か。あるいは、久住明弥本人か。

（何のために？）

自分を守るため、人を守るため、それとも利益を得るため？

何かが起こっている。

街の何処かで何かが浸蝕し始めている。

胸が酷くざわめいた。

嫌な予感がする。

こんなにも嫌な気分になったのは四年前。小学生の頃だ。街が死の蝶に冒され人が死んだ。そして一人行方不明になったまま今も見つかっていない。

あの時と似た何かが、今この街に巣くっている。

何かが。

1 安定を欠いた獣

酷い頭痛がした。

遠くで電子の音が一定のリズムを刻んでいる。それに合わせるように頭がズキン、ズキンと疼くように痛んだ。

目を開くのさえ億劫になる頭痛。それは思考を鈍らせ、気を萎えさせる。夢うつつの中でも感じる痛みは古い記憶を呼び覚ます。

鮮烈な痛みと共に浮かび上がるのは初めて獣になった時のこと。人の性が抜け落ち、本能だけが覚醒するように自分が誰であるかが分からなくなった。

あの時頭痛と繋がった思考だけが自分の理性だった。今のこの痛みはあの時の痛みによく似ている。

手放せば苦痛を感じなくなるだろう。

例えば大切な誰かを手に掛けたとしても、痛むことはない。それが、獣としての彼の本性だった。

「……っ」

太一は意識をはっきりさせようと髪の毛をかき混ぜた。

髪の毛にしては太い何かが音を立てて彼の頭から剥がれる。

一定のリズムを刻んでいた機械音が警告音に変わる。複数の人間が慌てて駆け込んできたのが分かった。

（ここは……研究室か）

うつすらと目を開くと、白衣を身に纏った人間達がせわしく動いているのが見えた。

誰かの手が太一の手を押さえ込み、太い注射針を打ち込んだ。痛みは大したことがないが、反射的に動こうとする手を別の誰かの手が押さえ込んだ。

安定剤だ。

彼は判断する。

何度も経験しているから、自分が何をされたのかが分かる。彼ら

が、太一の痛みを和らげようとしているのが分かる。

だが、煩わしい。

太一は力任せに白衣の連中を払った。

このままでは、彼らを殺してしまいそうだ。

目を覆い、低く唸るように言い放つ。

「……イツキを呼べ！」

「私ならここにいますよ」

冷静な声が戻る。

目を開くと、白衣の研究員達の向こうからいつもと変わらない様子の男がいつもの笑顔で立っていた。

南条斎。

戸籍上では今自分の兄にあたる人物だ。見つけて、ようやく、頭の中に冷静さが戻ってくる。自分の凶暴な衝動も、彼ならば抑えてくれるという安心感があった。

頭を抑え、太一は尋ねる。

「……状況は？ 何があった？」

意識が今ひとつはつきりしない。

何があって今研究所にいるのかがよく思い出せなかった。自分は確か、久住明弥を「監視」するために出かけていたはずなのだ。

「あなたは街中で獣化しました。私がそれを保護しました。……あ

あ、あなた方はもう戻って結構ですよ。後は私がやります」

斎に言われ、研究員達が返事を返して部屋の外へと出て行く。

徐々に戻ってくる感覚を支えに太一は上半身を起こした。ぶちぶちと身体に付いていた検査の為の線が抜ける。騒がしい電子音が切れたのは斎が電源を落としたからだろう。

太一は深く息を吐いて記憶を辿る。

（……獣化した？）

恐怖に怯えた少年の姿が脳裏をよぎる。

それは紛れもなく久住明弥を襲った証拠だ。

「私が対処しなければあなたは殺していたでしょうね」

斎は淡々とした口調で言う。

その口調から久住明弥が大した怪我もなく済んだことがわかる。彼はほっと息をついた。

「……話したのか？」

「誰に？」

「久住明弥にだよ。あいつとあったのか？」

「会いました。話もしました。最も今はこちらの事情を詳しく説明するわけにはいきませんでしたからね、簡単な説明をして納得して帰って貰いましたよ」

太一は半眼で男を睨む。

「じゃあ、お前」

いいえ、と彼は首を横に振った。

「私が‘説得’をするまでもありませんでした。彼はとても優しい子です」

「……馬鹿か、あいつは」

自分が殺されるかも知れない状況だったことを分かっているのだろうか。斎の介入が無ければ無事で済んだ自信がない。そもそも、意識的に獣化した時ならともかく突然何かに押されたように獣化した時には正気は保てない。

そう、太一は押されたのだ。

強い力に‘獣になれと’背を押された。

だから簡単に正気を失ってしまった。そうでなければ獣になっても人を襲わないように訓練してきた自分が襲うはずもない。人狼として人の世の中で生きていくことを選んだ自分が、簡単に自分を見失うはずがないのだ。

「イッキ」

「はい？」

「大丈夫なのか？」

「何がですか？」

聞き返す斎に太一は唸る。

「質問に質問を返すなよっ！」

「あなたの言葉が足りないんですよ。それでは何に対して聞いているのかわかりません」

太一は舌打ちをする。

頭の良い斎ならば太一が何を尋ねたかすぐに分かるはずだ。敢えて聞き返すのは相手に必要以上の情報を与えないためだ。太一に、という訳ではない。普段から、そうするように癖を付けているのだ。いつもそうだ。

慣れているはずなのに苛立つのは自分自身に不安があるからだろ
う。

太一は溜息をつく。

「……万が一にもお前の身に何かあれば、困るのは鈴華だ。街の方は騒ぎになっただろう？ 大丈夫なのか？」

「はい。警察がここに辿り着いたとしても強制捜査になるような証拠は残していません。それに、マスコミはそれほど騒いでいませんよ」

太一は顔を上げる。

獣になる瞬間を誰かに見られていなくても、あの街中で太一は姿を晒した。少なくとも久住明弥を襲った時に、他の人間の気配を感じている。彼の獣としての姿は狼だ。野犬と見間違われたとしても、少年が襲われたとなればマスコミは騒ぎ出すはずだ。

それほど騒がれていないとはどうしたことだろうか。

「爆発事故があったんですよ」

彼を睨む。

「……お前がやったのか？」

「まさか。いくら私でもうやむやにするためだけに人を巻き込んだりはしません」

どうだか、と太一は心の中で呟く。

斎は笑顔のまま続けた。

「このところ火事が頻発していますからね。その関連かも知れない

し、全く別の件かも知れませんが、大きな事故で犠牲者も出ました。不謹慎ですが感謝しています」

大きな犠牲者の出なかった事件よりも、何人もの犠牲が出た事件の方が人の興味を集める。マスコミはより衝撃的な事件の方に動く。おそらく警察も火事の方を重点的に調べるだろう。

確かに不謹慎ではあるが、少しほっとしたのも事実だ。

「……心配なら自分の心配をしなさい、太一」

うん、と太一は頷いて見せる。

「人狼がいるなんてマスコミが知ったら騒ぎ立てるもんな。気を付ける」

「そう言うことを言っているではありませんよ。あなたは今とても不安定になっています。薬で抑えています。いつ獣化してもおかしくないでしょう。変調があるならばすぐに私に言って下さい」

斎は少し不安そうな表情を浮かべた。

「私は、あなたを殺したくはありません」

「イッキ……」

獣化した自分がどんなに危険か知っている。

今回は何とかなったが、殺さなければ止まらない状況になるかもしれない。万が一の時は斎が自分にとどめを刺すのだろう。そうなりたくないし、させたくもなかった。

何だかんだと言いながらも太一にとって今一番信頼できるのは斎で、斎にとっては太一なのだ。

物理面でも、精神面でも。

太一は目を閉じて頷く。

「……分かった。何かあったらすぐにお前に言うよ」

「はい、そうして下さい」

斎はほっとしたように笑って見せた。

獣化することに不安なのは、太一だけではなく斎にとっても同じ事なのかも知れない。久しぶりに見た斎の不安そうな表情に少しだけ気持ちが悪くなった気がした。

2 入学式

『……新人生代表、岩崎勇氣』

挨拶を終え彼は何度か形式的な礼をとって壇上から降りてくる。入試で会った時、頭の良さそうな人だと思った。総代をするくらいなのだから入試でも良い成績をだったのだろう。第一印象は間違っていないかったのだな、とぼんやり彼をながめる。

不意に視線がかち合った。何故か睨まれたような気がしたが彼は何も言わずに段から降りた。

岩崎勇氣とは同じクラスになった。

当然それは偶然なのだろうが、だからこそ何か縁のようなものを感じる。入試の時のことで聞きたいことがあったため同じクラスになれてちょうど良いとおもっていた。そんなことを友人や弟に話せば樂觀的すぎると窘められるだろう。だが、明弥は勇氣に対して悪い印象を持っていなかった。近寄りがたいような怖そうな印象はあるが、不思議と悪い印象は持たなかったのだ。

入学式を終えて、教室に戻る人波に乗りながら明弥はぼんやりと別の事を考えはじめる。

トモミとは違うクラスになった。折角同じ学校に合格出来たのに別のクラスになるのは残念だったが、少しだけほっとしている。

彼女のことは好きだが複雑なのだ。

（こればかりは僕自身の気持ちの問題だね）

そう、トモミが悪い訳じゃない。少し前だったら本気で同じクラスになれなかったのを残念に思っていただろう。

だが「危険を引き寄せる体質」のこともある。それに何よりも、今気になっているのはバレンタインの時のこと。あの時見た人影。あれがそもその原因なのだ。

あの人影は……

「あつくん？」

呼びかけられてはっとした。

明弥はA組でトモミはC組だから近くにいるはずがない。遅れて歩いてしまったのかと周りを見渡すが、先刻見たばかりのクラスメートの顔がある。明弥が遅れて歩いていた訳では無さそうだった。

「どうしたの？ 何か暗い顔」

「そんな顔してた？」

知らない振りをするように言うと、トモミは頷く。

彼女にはやっぱり筒抜けだ。

「悩み事なら聞くよ？ 家で何かあった？」

「そんなじゃないよ。昨日パズルやっていて解けない問題があったんだ。懸賞の付いているやつ」

ああ、と彼女は眉間に皺を寄せた。

「それじゃあ力になれないや。……ね、岩くんと同じクラスなんだね」

「岩崎くんのこと？ 総代の」

「そー。中学の時クラスメートだったんだ。頭良いとは思ってたけど、まさか総代とはねえー」

彼女の視線の先には岩崎の姿が見える。

がやがや騒がしいためにこちらの声までは聞こえていないだろう。

明弥は小声で尋ねる。

「……どんな人？」

「良い奴だよ、アレで結構話しやすいし。ただねえ」

「ただ？」

トモミは腕組みをする。

「女の子にもてるからねー。あんま仲良くすると嫌がらせとか来るんだよね。その辺ちよつと問題？」

嫌がらせ、と明弥は呟く。

女の子達を怒らせた男子が痛い目を見ているのは知っているが、そんな風に嫌がらせをするようには思えない。男子一人のために。

「トモちゃんは？」

「え？」

「ああいうタイプが好み？」

一瞬彼女はきょとんとした。

次の瞬間、まさか、と吹き出す。

「格好良いとは思うけど、私あつくんの方が好きだよ。むしろ友達とかになりたいかなー、あ、私クラスここだから」

彼女は入り口を差して言う。

明弥は頷いて彼女を見送った。

「じゃあまたねえ」

「うん、また」

手を振って歩き出すと、すぐに別の女の子に話しかけている彼女の姿が見えた。彼女から貰うプリクラでも見たことのない顔だから新しい友達だろう。相変わらず友達を作るのが早い。明るく人懐っこい性格の彼女は誰でも気さくに声をかける。それが嫌だと言う人もいるだろうが、誰にでも分け隔て無く接する彼女の周りには自然と人が集まるのだ。

そういうところは見習わなければと明弥は思う。

おい、と声を掛けられたのはその時だった。

明弥が振り向くと入試の時に会った三人組がいた。もっとも、三人のうちの二人と言うべきだろうか。リーダー格ともう一人。三人目の姿が無いところをみると落ちてしまったのだろうか。

「てめえ、クズのくせに女といちゃついてんじゃねーよ」

どん、と肩をどつかれ明弥は少しバランスを崩す。

騒がしかった周囲がしんと静まりかえる。

入学式を終えたばかりの集団が、興味深そうに明弥達の方を見ていた。これはやはり絡まれているのだな、と思いながらも明弥の頭の中は三人目の事で一杯になっていた。

あの事件のあと、まともに試験を受けられずに落ちたのなら少し責任を感じる。明弥が危険を引き寄せる体質なら彼らは明弥の不運

に巻き込まれただけなのだ。

トモミのお守りを捨てようとした事はまだ少し怒っているが、それとこれとは話が別なのだ。

「何とか言えよ、クズ」

「え？ ああ、あの、もう一人はどうしたの？」

「井辻は休みだよ、クズ」

リーダー格の男は律儀に答えてくれる。

口は悪いけどいい人だな、と明弥は微笑む。

「ああ、そうなんだ。あのせいで落ちたのかと思ってビックリしたよ」

それにしても入学式に休みなんて井辻って人もついていないな、と明弥は同情した。これからクラス写真の撮影もあるのだから、その井辻は写真の上端に四角い枠の中に収められてしまうのだ。目立っていいっていう人もたまにいらっしゃるだろうけれど、普通はあまり嬉しくないだろうと。

「てめえ、舐めてんなよ？」

「ええっと、ごめん、そんなつもりじゃないんだけど……」

「クズとか呼ばれて悔しくねえのかよ」

襟首を捕まれたが、苦しくは無かった。

「あ、ああ、そうか。何で名前知っているのかなとか思ってたけど、そう言うことだったんだ」

てっきり「久住」を省略して「クズ」と呼んだのだと思っていた。実際親しみを込めてそう呼ぶ連中もいたためにそれが罵倒語の一つであると認識するまでに時間がかかった。

これは自分でもぼけていると思う。

怪訝そうな男に明弥は言う。

「俺、名前、久住明弥って言うんだよ。だからクズって呼んだんだなーって……あれ、どうしたの？」

呆れた様子の彼を見て明弥は瞬いた。

また自分は変なことを言っただろうか。

「……お前、馬鹿か」

「え？ あ……えーと、多分」

中学のクラスメートにも良く言われた気がする。

馬鹿にされているというよりはからかわれている感じだったから
気にしていなかったけれど、会うのが二回目の名前もろくに知らない
人にまで言われるとさすがに少し凹む。

成績云々の事を言っているのではないのだろうが、誰からも馬鹿
に見えるっての嬉しくはない。

彼は盛大に息を吐いた。

「……やめた」

「え？」

「お前に絡んでも面白くもねえ」

「えっと……ごめん」

申し訳ない気がして謝ったが、すぐに睨まれた。

「謝るなよ。……くそっ……調子狂うな」

彼は明弥の襟首を放し踵を返す。

いつの間にか廊下には先刻のざわめきのようなものが戻っていた。
多分驚いたのは一瞬で、明弥たちの会話を聞いていた生徒はろくに
いないのだろう。

面白く無さそうに頭を掻く男に、もう一人が話しかける。

「よかったんスカ、安藤さん」

「いいもなにも、あんなの相手してもつまらねーよ」

「まあ、それはそうですね……」

あの人、安藤って言うのか、と明弥は思った。

安藤はC組の教室に入っていく。ともみと同じクラスなら、もう
一人の名前も後で聞けるな、と何となくほっとした。

名前も知らない相手の顔だけ知っているというのはどうも気持ち
が悪い。

悪ぶっている感じだが、いい人そうだから、友達にもなれるだろ
うと楽観的に考える。

ふと、明弥は視線を感じ、振り返る。

A組の教室の出入り口の所で岩崎が観察するようにこちらを見ていた。その視線がかけ合っても岩崎は逸らそうとしなかった。

「？」

首を傾げると岩崎は不快そうに険しい表情をした。

何か悪いことをしたのだろうか。

「おーい、みんな教室に入れー！」

教師の叫ぶ声が聞こえて新入生達は慌てて自分のクラスに戻っていく。人混みに飲み込まれるように明弥もA組の教室に入った。

3 愚鈍

「岩崎くん、ちょっと待って！」

既に最初のHRが終わっていたためにクラス写真を撮り終えるとそのまま解散となった。親が入学式に参加した生徒は親と一緒に帰宅していったが、やはり高校の入学式ともなるとわざわざ来ない家も少なくはないらしく幾人かの生徒達はまだ残り無駄話をしていた。明弥の親も入学式には出てこなかった。

昇降口に向かう岩崎の側にも親の姿はない。おそらく彼の親も不参加だったのだろう。明弥が後ろから呼び止めると彼は一瞬振り返ったが、一瞥しただけですぐに取り出した靴を下に投げ落とした。不機嫌そうな彼は話しかけられるのも嫌そうに眉根に皺を寄せている。

他の生徒や教師達と話をしているのを見かけたが嫌そうな態度をとってはいなかった。こんな風にあからさまに嫌悪感を示した態度を取るのは明弥に対してだけだ。

やはり自分は彼に何かしてしまったのだろう。

明弥はそのまま帰ろうとする岩崎の腕を掴んで引き止める。

「待って、俺、何かした？」

じろり、と睨まれる。

やはり不機嫌そうだ。

「ごめん、何かしたなら謝るけど……」

「お前」

岩崎は顔だけ振り向いた。

二人の立っている場所には少し段差があり、明弥の方が高い位置にいる。それでも岩崎に見下ろされているような気分になるのは明弥よりも高い身長だけが原因ではないだろう。威圧感のようなものが彼の瞳にはあるのだ。

彼は静かな口調で言う。

「馬鹿だろう」

「……うっ、それ今日二度目」

明弥は口をへの字に曲げた。

先刻も同じ事を安藤に言われたばかりだ。多少自覚はしているが、やはり日に何度も言われると落ち込む。

「離せよ。伸びる」

「あっ、ごめん！」

明弥は慌てて彼の腕を放した。

服を直しながら岩崎は小さく息を吐いた。どこか観念したような表情。もう先に行ってしまう意思は無さそうだった。

明弥は自分の靴箱からスニーカーを出す。彼はそれを見つめながら抑揚のあまりない口調で言う。

「川上とは帰らないのか？」

明弥は頷く。

「トモちゃん親来ているから。……えっと、同じクラスだったって？」

「ああ」

言葉は少ないがちゃんと会話は交わしてくれるつもりらしい。

明弥は微笑んだ。

「岩崎くんってやっぱりいい人だね」

「馬鹿にしているのか？」

彼はあからさまにむっとした表情を浮かべる。

明弥は慌てて手を振った。

「そんなつもりじゃあ……」

岩崎は腕組みを詩ながら鼻先で笑う。

「おめでたい脳だな。大体、いい人、は褒め言葉じゃない」

「そうかなあ……」

「それで？」

「え？」

「こんな無駄話するために呼び止めたんじゃないだろう？」

何か気を悪くさせるような事をしたのなら謝りたいと思ったのは事実だ。けれど彼の言うようにもう一つ目的があった。色々聞きたいことがあるのだ。自分に忠告をしてくれた彼だから知っている気がするのだ。

明弥は歩き始めた勇氣に並んで歩く。

熱心な部活の勧誘の先輩達が配るビラを受け取りながら行く自然と一歩遅れる形になった。岩崎は差し出される一切を無視して歩いている。

「入試の時の事で聞きたいことがあるんだ」

「……」

後ろからでは彼の表情が見えないが、返事はなくとも聞こえているはずだ。明弥は目の前に差し出されたビラを全て受け取りながら小走りに彼に駆け寄りながら続ける。

「岩崎くんなら知っているでしょう？ 俺、自分が危険な目に遭うのはいいけど、誰かを巻き込むのは嫌なんだ。だから……」

岩崎は僅か振り返った。

嫌そうな表情をされて一瞬尻込みをする。

だが、引くわけにはいかない。これは自分だけの問題じゃない。解決出来る手段があるなら何でもする。だけど、それには情報が少なすぎる。あの時何故岩崎は自分に忠告してきたのか、その理由を知りたかった。知れば何か解決の糸口が見えてくるかもしれない。少なくとも、何もしないでただ嘆いているよりはずっとマシだ。

「始めに言っておく」

彼は睨むような目つきで明弥を振り返った。

校門を出る少し手前で立ち止まったために目の前に差し出された弓道部の勧誘のビラを受け取る形になった岩崎は小さく舌打ちをした。明弥も弓道部のビラを受け取り束になった紙を軽くまとめる。

「俺は、お前がシラを切っている可能性がゼロじゃないって考えている。むしろ状況証拠から見ればお前が意図的にやったと考える方

が自然だ」

「それって……」

どういう意味、という言葉は吹奏楽部の演奏にかき消される。頭の良い進学校なのに何故こうも部活動が熱心なのだろう。

岩崎は校門の外に向かって歩きながら少し怒鳴るような声で言った。

「それでもいいなら、……それで満足するなら、俺が見たこと全部話してやるよ」

「本当？ 話してくれるの？」

「ともかく、来いよ。ここじゃあまともに話も出来ない！」

彼は片耳を押さえながら苛立ったように吐き捨てた。

確かにここじゃあうるさすぎて会話もまともに出来ない。

明弥は頷いて紙束を鞆の中へと詰め込むと彼の後に続いた。

学校から離れ彼の後を歩くと騒がしい人の気配は消え、代わりに車が行き交う騒音が響き始める。西ノ宮高校から駅方面へと向かうとどうしてもこの大きな道路を渡ることになる。歩道橋を上がり大通りを渡ると駅前的大型のショッピング街になる。

バレンタインの日に事故が起きた場所も、赤毛の獣に襲われた場所も全てそのショッピング街で起こった事だ。

ちらりと横目で見やって少し重い気持ちになったのは純粹にあの時のことを思い出したからではなく、岩崎がいるからだ。万が一にも彼を巻き込むことになってしまえばと考えると気持ちが落ち着かない。彼まで巻き込むことになってしまったら、もう怖くて誰とも一緒に出かけられなくなるだろう。

それを解決するために、岩崎に声を掛けたというのに。

明弥は不安な気持ちを払拭するように頭を振った。

「どこまで行くの？」

「珈琲屋」

「えっと、ドトール？」

「いや、オレンジ色の猫のマークの」

「ああ……あの店。ああ、そうかく珈琲屋」か

明弥は納得したように頷く。

コーヒー屋と言われたから大雑把な言い方をすると思ったが、そうでは無かった。駅前的大通りから一本外れた道にある‘珈琲屋orange猫’という店があるのだ。その辺のカフェと違って学生の自分にはちよつと敷居の高いイメージのある店だ。ガラスにオレンジ色の猫のマークが描かれていて印象的だったから覚えていたが、そうでなければコーヒーに興味がない限り素通りしてしまう店だろう。

「コーヒー好きなんだ？」

「知り合いの店だ」

「ああ、それで」

明弥は頷いた。

地元の人間じゃなければあまり通らないような人通りの少ない道を抜けて、やや賑わいのある道へと出る。確か、この通りに珈琲屋があるはずだ。

当然曲がると思っていたが、岩崎は何喰わぬ顔でそこを通り過ぎる。

「……？」

「久住」

岩崎は近くに来いと言うように指先を軽く動かした。

指示通りに明弥は彼の横に駆け寄る。

「振り向かず歩け」

「え？」

反射的に振り返りそうになるのを堪えて彼の横顔をじっと見つめた。

険しい表情をしている彼は視線だけを明弥に向ける。

「尾行られてる」

4 願ったこと、叶わないこと

尾行？

誰が、誰を？

明弥は戸惑ったまま瞬いた。

「校門を出たところからずっと後を付けてきている。ガラスに映ったのを確認した」

岩崎は声のトーンを落として言う。

「……次の角で曲がる時に出来るだけ自然に振り返って確認しろ。左側にいる灰色の服を着た男だ」

明弥は半信半疑のまま、道を曲がる瞬間に何気なさを装ってその姿を確認する。

視線が交わった。

何か後ろ暗いことがありますと言わんばかりにあからさまに視線を逸らされる。

岩崎の言う通り、灰色の服を来た男だった。一瞬見た印象では三十代半ばか後半くらいだろう。多少ガラの悪そうな男に見えた。

見覚えはあるか、と岩崎の視線が尋ねる。見覚えが無いと視線だけで答えた。

一瞬だけでは分からないが、少なくとも彼が覚えている範囲内で知り合いではない。

彼がやや歩調を早めた。明弥はそれに合わせるように多少小走りになる。

後ろの男を意識して小声にしながら明弥は問う。

「ほ、本当に付けてきているの？」

「確かめて見るか？」

「……うん」

頷くと、岩崎が走った。

明弥も続くと、やはり後ろの男も弾かれたように走り出した。それはこの街中を歩く人にしてみれば不自然な反応。駅方面に向かって走っているのならば、電車に乗り遅れる事に気付いたという理由で走るのとは頷けるが、彼らが向かっているのは駅とは逆の方向。

尾行されているという岩崎の言葉は間違いないようだ。

不自然に思われても見失うよりはマシだと思ったのだろうか。明弥達が気付いたことが分かったのかも知れない。もはや彼に隠れている意思は感じられない。

男の様子を窺うために振り向いた瞬間だった。

「久住！」

岩崎が注意を促すように叫ぶ。

「え？ ……わっ……あっ！」

気が付いた時には遅かった。明弥は勢いよく何かに激突する。衝撃は自分の身体に跳ね返り、ぶつかった力と同じ力で跳ね飛ばされる。転倒を覚悟して彼は目を瞑る。

転倒はせず、代わりに腕に力がかかった。誰かが声を上げる。

「……っと、悪い、大丈夫か？」

「……？」

明弥は目を開いて瞬いた。

「え？ あれ？」

男が片手で明弥の身体を支えていた。二メートルはありそうな偉丈夫だ。あの狼を連想させるような赤い髪 of 男だった。

（……まさか）

あの人では無いだろうか。

あの時、路上で倒れていた人狼の男。

あの時顔は見えなかったが、体つきがよく似ている。

まさか、と明弥は心の中でもう一度呟いた。

赤毛の大男と言うだけの特徴で勝手に決めつけるのは失礼だ。こんな大柄な人はそんなにいないだろうが、全くいないわけではない。大体、あの人が普通に出歩いているのだろうか。あの方は、お兄さ

んが「保護」したのだ。

「太一くん、どうしたの？」

男の後ろ側で洋品店の自動ドアが開く。彼の半分以下の印象を受けるほど小柄な少女が男を見上げる。

男は優しそうな顔で微笑んで明弥を示す。

「ん、こいつと不注意でぶつかったんだ」

「身体が大きいんだから気を付けないとだめよ」

「面目ない」

少女に窘められ、男は苦笑を混じらせながら言う。

しっかり者の娘という感じだろうか。外見的には政志と同じか少し下という感じだが、大人しそうでずっと大人びてさえも見えた。

おさがが印象的な可愛い子だ。

彼女はにこりと微笑んだ。

その表情がまるで同年代の女の子に微笑まれたかのような錯覚を覚え、一瞬自分が今尾行されていてそれから逃げようとしていたことを忘れた。

「ごめんなさい、怪我ありませんか？」

ドキリとした。

弟と同じくらいの女の子を恋愛の対象になんか見たことがない。

けれど彼女の表情があまりに大人びていて驚いたのだ。

明弥は一拍置いて答える。

「あ、うん、大丈夫……」

「おい！」

岩崎が慌てたように明弥の肩を引いた。

瞬間的に現実を思い出した。

振り向いた先で追いかけてきていた男と視線が混じる。こちらに向かつて走ってきた男だったが、明弥と顔を合わせる形になって戸惑ったのか動揺した素振りを見せた。或いは明弥の後ろに立った大男に驚いたのだろう。

男は踵を返した。

岩崎が動く。

逃げるように走り出す男を追いかけるように彼は走った。

ひゅうと、大男が口笛を吹く。

「おお、俊足」

狭い路地に入り込んだ男の襟首を岩崎が掴む。

大通りには人が行き交う姿があったが、狭い路地で繰り広げられていることに気が付かないのか見向きもせず素通りしていく。たまに振り向いた人がいても、一瞥しただけで面倒なことに巻き込まれるのを嫌ってかそのまま早足で通り過ぎていった。

明弥が路地を覗き込むと男がもがき、反撃をするところだった。

「岩崎く……」

「止めとけ、お前じゃあ足手まといだ」

彼を助けるために走りかけた明弥は太一と呼ばれた男に制され止まる。

男を見上げると顎をしゃくって見るように促す。明弥は慌てて視線を岩崎の方へと戻す。

岩崎は強かった。

ケンカ慣れをしていると言うよりは、格闘技の経験があるような動きだった。身のこなしに一切の無駄がなく、冷静に見つめる眼差しには余裕さえも見て取れた。

繰り出された拳を岩崎は難なく交わし、足を大きく振り上げた。

勢いよく振り下ろされた瞬間、男の身体ががくんと沈む。

踵落とした。

格闘技系の番組でくらいしか見たことがない。

確かに明弥が近くに行けば逆に足手まといになりそうだ。

「凄い」

女の子が呟く。

同感だった。

生徒総代になるほど頭が良く、見た目も格好良い。その上強いともなれば彼は完璧だ。凄いと言う以外に感想がもてない。

「この、クソガキが！」

岩崎の足下に蹲った男が起きあがった。

手元にきらりと光るモノが見える。

刃物だ、と悟る。

「危ないっ！！」

明弥は叫ぶ。

見ていられずに目をきつく瞑った。

穏やかな生活を望んでいた。

自分のせいで誰かを巻き込んだり、傷つくことのないような生活を望んでいた。

そのために岩崎に話を聞こうと思ったのに、今、彼が危機に瀕している。

どうして、と思う。

何故今刃を向けられているのが自分ではないのだろう。

せめて自分だったら諦めもついたのに。

平穏な生活。

そんな当たり前の生活すら、望めないのだろうか。

5 狂気の刃

「子供相手に刃物とは良い度胸をしてんじゃねーか」

からん、とアスファルトに金属が落ちる音を聞いて明弥は目を開く。彼の一からは太一の背中と怯える男の姿しか見えなかった。

今まで太一は自分の後ろで成り行きを見守っていたはずだ。

いつの間にあんなところに移動したのだろうか。

明弥は慌てて近付いた。

後方から少女が小走りで付いてくる気配を感じた。

「仮にガキ共が万引きしたとしてもな、刃物を出した時点でお前が悪い」

「ひっ……」

ガラの悪そうな男は息を飲んだ。

男も消して小柄な男ではなかった。だが、太一と並ぶとまるで子供のように見えてしまう。三十代くらいの男だ。顔にはやはり見覚えがない。

岩崎は涼しい顔で男を睨んだ。

怪我をしている様子はなく明弥はほっとした。

「……万引き？」

「してないよ」

少女の呟きを聞いて明弥は慌てて否定する。

冷ややかな口調で岩崎が問う。

「お前、何で俺たちの後を付けた？」

「何だ男子高生をストーカーか？ 随分な趣味だな」

太一は低く笑う。

「ち、違う。俺は頼まれただけだ！ そいつを監視しろって」

明弥は自分を指差されびくつとする。

監視？

どうして？

「誰に頼まれた？」

岩崎が尋ねる。

「……」

男は答えなかった。

苛立ったように太一が男の頭部を掴み引きずるようにして壁際に押しやった。

ちょうどビルの二階に上がるための階段通路だ。周囲からは死角になって見えなくなる位置で男の頭部を壁に押しつけながら脅すように低く唸る。

「誰に、頼まれた？」

「し、知らない！」

「とぼけるなよ？ 知らねえで済ませられる問題じゃねえ」

男は刃物を出したのだ。

それで知らないで済まされる問題ではないことを明弥にも分かる。だが、壁に押しつけられて怯えている男の姿を見ると不憫にさえ思えた。岩崎にナイフを突きつけたのは許せない。だからといって怯える男をなおも脅す理由にはならないのでは無いだろうか。

（だって、本当に知らないのかもしれない。それに）

明弥はちらりと女の子を見る。

こんな小さい子に暴力シーンを見せて良いのだろうか。彼女は無言のまま成り行きを見守っていたが、これが傷になってしまいかもしれない。

「本当に知らないんだ！ 男に金を渡されて、こんなヤバイガキなんて思わなかったから、それで……」

男の発言はまるで明弥が岩崎と太一を従えていると誤解しているような言い回しだった。もちろんそんなわけが無いのだが、そう誤解されてもおかしくない状況だと気が付く。明弥が二人に守られた形になったのは事実だった。

「どんな男だ？」

「み、右手に、傷のある……男」

「傷？」

男は強い力で押しつけられて、苦しそうに言った。

「やけどの……跡」

太一は眉をひそめる。

明弥はたまらず彼の衣服を掴んだ。

「もういいです」

これ以上は、もういい。このままだと彼が男を殺してしまいそうで怖かった。

明弥は拒否するように頭を振った。

「十分ですから」

「十分ってお前なっ！」

太一が吠える。

彼が明弥を振り向いた一瞬の隙を狙って男が彼の腕から逃れた。

慌てて捕まえようとする太一の腕をすり抜け、男が地面に落ちたナイフを拾い上げる。

激しい感情で歪んだ男の視線とかち合った。

避けようと思えば避けられた。

だが、明弥はその場から動けなかった。

身体の奥底から何かが吐き気のようにこみ上げてくる。

もう、止めてくれ。

「久住！」

岩崎が叫ぶ。

刺されたら死ぬだろうか。

不意に力が抜ける。

正直、もうどうだっていいと思った。

立て続けに色々な事が起こった。それで混乱したせいもあるだろうと思うが、自分が原因で周囲に迷惑を掛けているのならいつそ死んでしまった方が楽なような気がしたのだ。

それに、

「止めて！」

少女の叫び声。

明弥は我に返った。
瞬間的に恐怖が蘇る。

「あ……」

目の前に迫る刃が、

「!？」

跳ね飛ばされるようにして消える。
変わって赤が視界に入ってくる。

全身に赤い毛を生やした人型の獣。

その顔は、紛れもなく

「……太一くん？」

少女が戸惑った声を上げる。

明弥も悲鳴を上げそうになって口元を押さえた。

気のせいなどではない。今、目の前で太一が獣の姿に変化しそうになっている。いつだったか見た映画のワンシーンのように、男の全身から吹き出すように赤い毛が生えてくる。その身体が、顔つきが、徐々に狼のように変貌していく。

「ぐ……ああっつ！」

苦痛にさいなまれるように彼が呻り声を上げた。

「ひっ……」

彼に跳ね飛ばされた男が屍餅を付いたまま後退していく。

何が起こったのか、理解しなくなかった。

あの時の「人狼」に目の前で人間が変化しようとしている。夢でも見ているのではないか。人がこんな風になるなんて、信じたくない。

ぱり、と音を立てて衣服が破れる。

丈夫そうな革のジャンパーがいてもあっさりと引き裂かれる。

獣の鋭い視線が明弥の方に向けられる。

まだ人の形の残る男の唇が、ゆっくりと動かされた。

『逃げろ』

6 遁甲

「太一くんっ！」

「止せ、行くな」

少女が太一の元に走り出しそうになるのを岩崎が止めた。

「でも……」

「お前の知っている、タイチくん」と少しでも違うなら、近付くな！」

鋭く言われ少女は唇を噛む。

太一は苦しそうに頭を押さえ、呻き声を上げている。

必至に自分を押さえつけているように明弥には見えた。

ようやく立ち上がった男が、半分這うようにしながら走り去ったのが見えたが、今はそれどころではない。

大通りの方からざわめきが起こる。

ようやく事態の異常さに気が付いたかのように人だかりが出来ているが、むしろそれは危険と分かっているのではなく、興味をそそられているだけだと分かる。所々で携帯カメラの撮影音が響いてくる。

ざわめきの中から映画や撮影という言葉を取り取る。

確かに、事前に同じ獣に遭遇していなければ、男が狼に変身する姿など現実だと信じられなかっただろう。だが、明弥がそれが特撮の撮影でないことを知っている。

「久住、逃げるぞ」

「逃げるって……でも」

岩崎は明弥の肩を掴んで小声で囁く。

「この辺には警察がいる。万が一の時には俺たちよりも上手く対処してくれる」

「警察？」

「ともかく、行くぞ。お前もだ」

言われ少女は頷いた。

岩崎は携帯電話を確かめて、次いで太一の様子を振り返った。太一は頭部を抱えながらよろよろとこちらに近付いてきている。必至に何かと戦っているように見えた。

ばしゃ、と岩崎がアスファルトに何かをまいた。

手元にはミネラルウォーターのペットボトルが握られている。赤毛の男と自分たちを隔てるように、道路上に水で一本の線が引かれた。

引かれた線から何か青白い光が陽炎のように揺らめく。

「……？」

「簡単な目眩でした。どの程度利くか分からない。アレが全力で追いかけてくる前に安全な場所まで逃げる」

訝る明弥に岩崎は説明を加える。もつとも、その説明を聞いたところで明弥には彼が何をしたのかが理解できなかった。

彼は歩きながら携帯電話に耳を当てる。

明弥はその後に付きながら少女の手を握った。

「俺です。説明は後ほど、用件だけ伝えます。駅前オレンジの……

2—3—3」

彼は電信柱にかかったプレートを確認しながら言う。どうやら電話の相手に場所を知らせているらしい。

「はい、事件です。……いえ、俺は神社の方に。……そうです、願います。……はい、そちらもお気を付けて。……タクシー拾うぞ」

電話を切った後すぐさま彼は明弥達を振り返った。

どうなっているか分からないが、今は彼に従うしかないと思った。どっちにしても明弥にはどうして良いのが判らないのだ。なら、少しでも把握していそうな彼に指示を仰いだ方がいい。

少女もまたそれに不服は無いらしく大人しく彼の言葉に従った。目の前で知っている男が突然獣の姿に変わり始めたのだ。混乱しているもおかしくない。だが、彼女はそのことに関して混乱してい

る様子は無かった。おそらく、彼女は彼が「人狼」であることを知っているのだ。明弥を助けてくれたあの人と同じように、彼女もこのことを知っている。

けれど何かいつもと様子がおかしい。彼女の様子から、普段は獣となってもこんな風にはならなかったのだらうと思う。

だから岩崎に従っているのだらう。

駅前に着くとタクシー乗り場に行く前に彼はタクシーを捕まえる。少し不審そうにドアを開けた運転手にタクシーチケットを手渡し彼は指示通りに進むように言う。

少女を挟むようにして後部座席に乗り込んだ学生二人を不審そうに見ていた運転手だったが、鬼気迫るような岩崎の表情に大人しく頷いた。

「……その先左折、その次の信号も左折」

「それならこの先の広場でＵターンした方が早……」

「言うように進んで下さい。お願いします」

運転手は不可解そうに首を傾げたが、彼の言うように進み出す。

彼の指示は目的地に早く着くルートではなかった。まるで道に迷っているように何度も似たような道を進んでいる。

明らかに効率が悪い。

「……何やっているの？」

少女が不思議そうに尋ねる。

「遁甲だ」

「トンコウ？」

「さっきも言ったけど、簡単な目眩ましだよ。あの男……彼が俺たちを追いかけてくくしているんだ。……ああ、そこは右折です。その先真っ直ぐ。……日と時間がいいから今回は上手く行くが本来はこんな簡単にはいかない」

明弥は後ろを振り返る。

前に彼に追いかけられた時には猛スピードで接近してくる赤い影が見えた。しかし今日はそれがない。それどころか、騒ぐ人の気配

すら感じなかった。

岩崎は少しだけ表情を緩める。

「無理に信じなくても良い。分かる必要もない。ただ、安全に進む方法なのだと思っていればいい」

「岩崎くん……」

彼はちらりと女の子を見て、次いで明弥を見据えた。

その視線は鋭いが恐ろしくは無かった。

「お互いに聞きたいことも、確かめたいこともあるはずだ。だが、まずは目的地に着くのが先だ。遠回りになるが、それでもあと十分くらいで着く」

岩崎は身を乗り出して運転手に次の指示をする。

「……次の信号左折、そのまま真っ直ぐ山の方へ」

特殊な客に少し楽しくなってきたのか運転手は威勢良く返事をする。

こんな風は無茶なルートを指定する客なんて今までにいなかったのだろう。イライラして怒り出すような運転手でなくて良かったと思った。

こう言うところは恵まれているのだと明弥は思う。

自分の身の回りで他人が聞けば不運としか思えないことばかり起こるけれど、明弥はその分人に恵まれている。いい人なんて言えばまた怒られそうだが、運転手も岩崎もやっぱりいい人なのだと彼は思う。

そして彼女も。

明弥はちらりと隣を見る。

握ったまんまの少女の手が少し汗ばみ震えているのが分かった。

「大丈夫？」

声を掛けると少女は微笑む。

「はい。平気です」

控え目だが、明るい笑顔。

この状況には似つかわしくない。

それでもほっとしてしまふような力が彼女の笑顔にはあった。

「そろそろ着くぞ」

岩崎が言う。

いつの間にか木々の多い静かな場所まで来ている。

タクシーはその中でも一際木の多いところで停車する。すぐ脇に、赤い鳥居が見えた。

「……神社？」

少女とともにタクシーを降りて、鳥居を見上げながら明弥は呟く。運転手に礼を言って降りてきた岩崎が横にならんだ。

「岩崎神社だ」

「岩崎って……」

彼は肯定するように首を縦に振った。

「ここは俺の先祖が代々宮司を務めている」

7 影響の波

神社の拝殿の脇を抜けると、そこには道場のような建物があった。ここで神事の時に奉納する舞の練習などをするのだと岩崎は言う。

彼に促され道場に入ると暖かいような空気を感じた。木々の覆い茂る神社の敷地内は他の場所より少し温度が低い。四月の暖かい気候とはいえ、少し肌寒さも覚えるほどだ。それに比べてこの建物はまるで暖房か床暖房のようなものが入っているかのように暖かだった。建物や床は古く黒光りをしていてとても床暖房が入っているようには見えなかった。

妙な暖かさに違和感を覚えながらも中に入ると岩崎が入り口に何かを貼りつけたのが見えた。

お札のようだ。

それも彼の言う「遁甲」の一つなのだろうか。疑問には思ったが、尋ねなかった。今はそれよりも聞きたいことが山ほどあった。

「まずは聞きたい」

座るように促しながら岩崎が少女を見る。

彼女は南条鈴華と名乗った。獣の男、南条太一とは兄妹なのだと言う。

「君は彼が……人とは違うことを知っていたのか？」

彼女は頷きながら座る。

明弥もその近くに座る。練習場ということもあってか座布団も無かったが、床はやはり妙に暖かい。床に直接座っても冷える印象はまるでなかった。

「はい、知っています。でも、あんな風に突然変化したのは初めてでした」

「苦しんでいたのはいつもの事か？」

「いいえ。見たことありません。いつも太一くんは自分の意思で変

化していたし、自分の意思を失うなんてこと……ありませんでした」
どうして急に、と鈴華は視線を落とした。悲痛そうな表情で俯いた彼女に明弥は掛ける言葉もなかった。

岩崎はそんな彼女を静かに見つめながら思案するように口元に手を当てた。

彼は驚くほど冷静だ。明弥は太一の兄を名乗る男から説明を受けていたから、突然変化した太一を見ても冷静でいられたが普通こんな風にはいかないだろう。

神社の関係者というのはこういう現象に慣れているというのだろうか。それとも、彼だけが特別なのだろうか。

明弥はじっと彼を見つめる。彼はやがて静かに明弥を見据えた。

「多分、久住が原因だろうな」

「えっ？ 僕！？」

突然自分に振られて明弥は頓狂な声を上げた。

明弥は慌てて言い直す。

「あ……えっと、俺が原因って……」

「入試の時もそうだった。お前を中心に不可視の波のようなものが出た」

「不可視の、波？」

尋ねると岩崎は頷く。

「限りなく霊体に近い波。外部に向けて勢いよく放たれる‘オーラ’と言った方が分かりやすいか？ 厳密には違うがそれに似たものだ」と認識してくれればいい」

オーラと言わればんやりと納得する。

「不可視なのに岩崎君には見えたの？」

指摘すると彼は少しだけ眉根を寄せた。

「俺のことはどうでもいい。問題はその波だ。その波に影響されるように入試の時は水道管が破裂し、今回は彼が変化を起こした」

「……他人に影響する力……インパクト」

少女がぼつりと呟いた。

岩崎が鈴華の方を向く。自然と明弥も彼女の方を見た。

「お前、何か心当たりが？」

少女は頷く。

「聞いたことがあります。他人の潜在能力を引き出す力です。爆発のように起こり、他人に影響を及ぼす力なので、インパクトと呼ばれていると」

不可解そうに岩崎は眉をひそめた。

「何故君がそんなことを？」

「私の兄が……そう言った能力を研究しているんです」

「兄というと先刻の？」

鈴華は首を振る。

おさがが左右に揺れた。

「違います。上の兄、斎です」

「あ、その人、こういう髪型で……スーツの似合う優しそうな人？」

身振りで説明すると少女は驚いたように目を見開いた。

少し驚き、警戒するような素振りを見せる。

「そうですけど……兄を知っているんですか？」

「前に太一……さんに襲われた時に助けてくれたんだ。名前聞きそびれてどうしようかって思っていたんだ」

「そうなんですか」

少女はほっとしたように微笑む。

岩崎が睨むように明弥を見た。

「……なるほど、覚えていないというのはやっぱり嘘か」

「え？」

呆れたように岩崎は息を吐く。

「お前、警察に覚えていないと言っただろう。車に乗り込んでからのことは良く覚えていない、気付いたら病院にいた、それは嘘だったんだな」

「え？ ええ？ どうしてそんなこと」

あの時のことは誰にも言っていないはずだ。警察に事情を聞かれ

たことすら嫌でも事情を知ってしまった家族にくらいしか話をしていない。何故詳しいことまで彼が知っているのだろうか。

彼は少し首を傾げる。

「お前色んな刑事に聞かれただろう。その中にいなかったか、岩崎という女の刑事」

確かに病院で意識を取り戻してから色んな警官に入れ替わり立ち替わり同じ事を何度も聞かれた。その中に確かに岩崎と名乗った女刑事がいた。小柄で若い女性なのに刑事なのだ、と強く覚えていたのだ。

考えて見れば同じ岩崎だ。

岩崎なんて苗字は珍しくない。けれどこんな言い方をするとすることは血縁なのだろう。そう言えばどことなく雰囲気似ているような気がした。

「あ、あれ、もしかしてお姉さん？」

「母親だよ」

「ええっ？ あの人まだ三十台前半くらいだったよ！？」

驚愕した明弥の声に恥ずかしくなったのか、岩崎はそっぽを向く。「……俺の母親のことはどうでもいい。嘘を付いたこともこの際置いておこう。問題はこれからどうするか、だな。……聞くんが、彼はどうやって人の形に戻る？」

「自分の意思で、です」

鈴華の答えに岩崎が頷く。

「今回の場合人の意思を失っている。つまり正気を戻させるか、気を失わせない限り、彼を人の形に戻す手段はない」

「そんなの、どうやって？」

足の速さも、腕力も、人を遥かに凌ぎ簡単に意思を失わせられない事を経験から知っている。明弥達の力だけでどうこう出来る相手ではない。

「それを今考えている」

岩崎は厳しい顔で答える。

明弥も難しい顔で考え込む。

(……斎さんなら)

彼なら出来る。

連絡先なら鈴華が知っているだろう。

(だけど、それはダメだそれは最後の手段……)

あの日、別れ際に言ったのだ。

彼に使った麻酔は強いものなのだと。今回は大丈夫だったけれど、頻繁に使うことがあれば命に関わることさえ出てくる、と。

だからダメだと明弥は思う。

彼が人でなくとも、例えば自分を襲ってくる相手だとしても、死なせていい、危険な目に遭わせて良いなんて言う理由になんてならない。

どうすれば良いのだろう。

斎に連絡を取って最良の手段を考えて貰うのが一番いい。けれども、もしもあの薬を使う事が最良なら、太一が危なくなる。明弥達の力で何とか出来るならそれに越したことはない。

優しそうな人だと思ったのだ。

外面は厳つく怖そうな印象の人だったが、鈴華を大切にしていたし、出会ったばかりの明弥を庇ってくれるような人だ。獣の姿は怖いけれど、どうでもいいなんて思えなかった。

(やっぱり斎さんと連絡を……)

決めるのは自分だろう。

岩崎の方が冷静で決断力もあるだろうが、彼は巻き込まれたただけだ。鈴華はまだ小学生で、太一の妹。彼女に決めさせてはいけない。今、選択すべきは自分。

だけど、分らない。

何が正しいのか、最良なのか。

何も分らない。

ピリリリ、と不意に携帯電話の電子音が鳴る。

明弥はぎくりとして顔を上げた。

鳴っているのは岩崎の携帯電話だ。彼は携帯電話を見つめたまま一向にその着信に出ようとはしない。

「出ないの？」

「……出る、しかないようだな」

「？」

意味が分からず明弥は首を傾げる。

彼は顔をしかめたまま携帯電話を耳に押し当てた。

8 圏外

「…………はい」

岩崎は間を置いて声を発する。

相手は誰なのだろうか。

訝しがるような彼の表情は変わることが無かった。短く確認するように返事をし、必要最低限の事しか話していないように聞こえた。鈴華も不思議そうに彼の様子を見守っている。

やがて岩崎は携帯電話を明弥の前に突き付ける。

「久住、お前に電話だ」

「俺に？」

出る、と促されて仕方なく明弥は携帯電話を受け取る。

岩崎の携帯に電話をかけてきた相手が、自分に用があるとはどういう事だろうか。まさか、警察の関係の人なのだろうか。

携帯電話を持ち慣れていないせいか、何処か変なボタンを押してしまいそうで余計に緊張をした。

「もしもし？」

声をかけると聞いたことのあるような声が戻ってきた。

『明弥さん？』

「あ、はい」

『水守祐里子です』

「えっ……あ？ 水守さん？」

名前を言われて一瞬のうちに誰なのかを思い出す。バレンタインの日、明弥が病院まで付き添った女の人だ。「一度だけ助けます」と電話で言われたきり連絡がなかったからすっかり忘れていた。

岩崎と知り合いなのだろうか。だとしたら何故今自分が一緒にいることを知っているのだろうか。

混乱していると向こう側から笑うような声が聞こえる。

『私の助けが必要だと思ったから連絡を差し上げました。そこだと

携帯電話が一番いい媒体だったから利用しただけですよ』

「えっと……意味が分からないんですが」

水守はくすりと笑い声を上げた。

『あまり長く介入していると術者に負担をかけるから手短に言います』

「はあ」

『‘引いてダメなら、押してみろ’』

「はい？」

『占星の結果です。本当ならそっちに行ってあげたいけど、今仕事
中なので。多分、言葉だけでも役に立つと思うのだけれど』

前の時と同じだ。

彼女の言葉は今ひとつ分からない。

けれど何故だろう。

それが意味のある言葉に聞こえる。

『先刻の彼、多分彼なら』

ふつ、と突然音が途絶えた。

「もしもし？」

声を掛けても返事は戻らなかった。切れたのだ、と分かる。

結局、何だったのだろう。

携帯電話を耳から離すとすぐに岩崎の声が聞こえた。

「久住」

「この道場は圏外だ」

「……？」

「電波が入らない場所では携帯は鳴らない。……この意味が分かるか？」

「えっと」

それはつまりどういう事だろうか。

携帯電話を見ると確かに「圏外」の文字がある。携帯は持っていないのだけど、圏外では着信しない事くらいは分かる。だが、水守からの着信があった。

どう考えても矛盾している。

考えるほどに分からなくなった。

混乱をする明弥の代わりに鈴華が答える。言葉を選んでいるように慎重に。

「今の着信の相手は普通の人ではないんですね？」

「そう言うことになる」

分からない。

明弥は首を傾げた。

「普通の人じゃないって……水守さんはちゃんと生きている人だよ」

「そう言う意味じゃない」

ますます意味が分からなくなり明弥は瞬く。

鈴華は全て分かっているという風に落ち着いていた。分からないのは明弥だけだ。

置いてけぼりになったが、話は続く。

「久住、彼女は何と？」

「ああ、うん、ええっと……」

混乱していたが、一人で混乱している場合でもない。明弥は彼女から言われたことをそのまま伝える。

話の流れで水守と出会った時の事も簡単に話した。バレンタインの時の事故のことにまで言及するとさすがに岩崎は顔をしかめたが何か追及することは無かった。

一通り全て話し終わると彼は暫く黙り込んで何か思案する様な素振りを見せた。

やがてぼつりと彼は呟いた。

「実のところ、俺が人狼に会ったのは彼が初めてじゃない。だから彼がずっと獣の姿でいることに危険性があることを承知している」

「危険性？」

「人としての性が抜ける。つまり、身も心も完全に獣になってしまふと言うことだ。そうなれば言葉は通じないし、人を襲った場合人によって処分される」

ぎくりとした。

それはつまり、太一を殺すと言うことだ。

脳裏に浮かんだのはアスファルトの上に倒れた赤髪の男。あの時は気を失っているだけだったが、あの時の杞憂が現実のものになってしまう。

そんなのは嫌だ。

「増して今回は暴走している状態だ。早く戻してやらなければ獣に飲まれる。……南条斎と連絡は取れるか？」

「とれます。でも、今は遠出しているから、多分戻るのに時間がかかると思います。急いでも、深夜」

確認するように彼は頷く。

「おずおずと声を上げる。」

「な、何とかならないの？」

「だからそれを今、考えていたんだ。水守祐里子の言葉を信じるのなら方法が無いわけじゃない」

視線が彼に集中した。

少し緊張した風に岩崎が言う。

「お前の……久住の波をもう一度彼にぶつけるんだ」

「えっ」

「インパクトをもう一度起こすんですか？」

不安そうに彼女が尋ねる。

こくりと頷く。

「毒を以て毒を制す、聞こえは悪いけれど、そういう方法はいくらでも使われる。やってやれない事はないだろう」

「でもやり方が……」

可能性があるなら、やりたい。

けれどそのインパクトを起こす方法が分からない。

「強い感情」

「え？」

「久住が無自覚で使っているのなら今までの状況を考えて、おそら

く引き金になっているのは久住自信の感情だ。強く願えば意識的に
行うことも可能だろう」

上手く、行くのだろうか。

失敗すれば自分だけではなく他の人にまで迷惑がかかる。まして
自分の能力について今さっき言われたばかりで自覚さえもない。そ
んな状況で上手くいくのだろうか。

何より太一は？

インパクトという能力で無理矢理獣になった。もう一度同じ力を
当てられて今度こそ取り返しの付かないことにならないだろうか。
だけど、他に方法が分からない。

岩崎の言葉を、水守の言葉を信じて良いのだろうか。

二人ともいい人だが、今回は人の命に関わること。簡単には決め
られない。

(でも)

「俺が出来る限りのサポートはする。無理強いはしない。やるかど
うか決めるのはお前だ」

「……」

明弥は鈴華を見る。

彼女は縋るような目で見ていたが、視線が交わると気まずそうに
目を伏せた。

ぎゅっとまぶたを閉じる。

そしてゆっくりと開いた。

「やるだけやってみる。だから、」

手伝って欲しい。

明弥の言葉に、岩崎は力強く頷いて見せた。

9 馬鹿息子

いつも突然呼び出される。

そう言う職業に就いているのだから仕方がないと思いつつも苛立ちがあった。自宅にいたのだからまともなスーツを着る余裕もあったが、腹いせのように女性用のブランドパンツスーツを着込んできた。開襟シャツを着てメイクもしっかりとできてきている。

腰をくねらせながら廊下を歩くと、藤岡に慣れていない別の部署の人間達が驚いたように振り返ったが一課に近づけば近づくほど藤岡を気にする人は少なくなる。他の刑事にするように挨拶をし、堂々と廊下を歩く藤岡の為に道を譲った。

藤岡は扉の前で一度立ち止まり口紅が取れていない事を確認すると、ようやくドアを開いた。

すぐに男女の言い争う声が聞こえてくる。

藤岡は苦笑した。

近くにいた若手刑事の肩に手を置いて話しかける。

「なあに？ またやってんの？」

「ああ、お疲れ様です。今さっき始まった所ですから暫く続きますよ。この光景、もう一課の名物ですよね」

伊東は笑いをかみ殺したような表情で立ち上がる。

彼が座っていた椅子を奪うように座りながら藤岡は彼を見上げる。

「あなたも随分と慣れたわよね。最初の頃はおろおろしていたのに」

「さすがに何年も相手していれば慣れますよ。コーヒー飲みますか？ 不味いですが、目が覚めますよ」

「不味さでね。その不味さがやみつきになっちゃうのよね、こういう仕事していると」

藤岡は欲しいと言うのを手で示す。

伊東は頷いた。

「えっと、ミルクと砂糖、どうします？」

いらない、と彼は返事を返す。

セルフの飲料コーナーからコーヒー用のプラスチックカップを出しコーヒーを注ぐ。何も入れずに藤岡の前に差し出し、自分用には砂糖を入れてかき混ぜた。

「珍しいですね、ブラックなんて」

「ダイエットしているの」

藤岡はふふと、科を作って笑った。

その様子に伊東は平気な顔で笑った。自分の女言葉も女装も慣れたな、と藤岡は思う。どう見ても綺麗なオカマにしか見えない彼の女装に最初は軽い嫌悪感を示していた伊東だったが今では全く気にする様子もなく接してくる。

本名ではなくテレビで良く見かけるアイドルの名前と同じ「藤岡真由美」で通しても彼はまるで気にしなくなった。誘おうとコナをかければさすがに嫌そうにしたものの、彼の女装を否定はしなかった。

（この子ってば、私より順応性高いわよねえ）

不味いコーヒーを飲みながら上司の喧嘩を見つめる。

中津龍二と岩崎愛の仲の悪さは一課でも評判だった。

超常能力が存在するという前提で捜査するゼロ班の班長である愛と、超能力を認めない中津とでは思想が全く違う。常に対立しあうのは無理もない話だった。

ただ、中津が愛に突っかかる理由はそれだけでは無い。

もしも超常現象を全て否定したいだけなら、ゼロ班全員を敵視していても良さそうなのだが、ゼロ班に属する伊東を中津は後輩として可愛がっている。服装のことで注意される事もあったが藤岡も敵視されている訳ではなかった。

だから、愛に突っかかる理由はそれだけではない。理由になりそうな事を知っているだけに、藤岡は複雑な気持ちでかつて同じゼロ班の一員だった中津を見つめる。

「で、今日は？」

「例の、中津刑事が会った赤毛の獣の話です。今日、また出現しました」

「それで私も呼び出されたの？」

「やれやれ、と藤岡は机に肘を突く。

「実はその対処で揉めているんですよ」

「っていうと？」

「目撃者の証言では人が突然獣に変わったそうなんですよ」

「へえ、それって……」

伊東は頷いて言い争う二人の方を見る。

「はい、愛さんは人なのだと言い麻酔銃を使うべきじゃないって言い張っています。しかし、何の証拠もないと中津さんが突っぱねています。写真を撮ったという目撃者が多数いたんですが、そのどのカメラにもちゃんとした画像が残っていませんでした」

写真に残った場合と残らなかった場合、残らない方が本物である可能性が高いと経験上知っている。最近のカメラは性能が良くなった分、不可視の光までとらえてしまうのだ。それで余計に曖昧にしか映らない。

今回の件で言えばその獣に変わった人というのは人狼なのだろう。肉眼で直接見たわけではないが、藤岡はかつて一度人が狼に転変する姿を見たことがある。その時、その人の身体を覆うように普通の人間に見ることの出来ない光が包み込んでいた。

おそらく目撃者のカメラに映ったのはその光に飲まれた姿なのだろう。

そんな曖昧な写真で中津が納得するとは到底思えない。

どっちにしても愛が、最終手段、を使えば中津が折れざるを得ないのだが、もう暫くこの不毛な言い争いが続くのだろう。

「時間稼ぎかしらね」

伊東は苦笑する。

「だと、思いますよ」

「それにしたって中津さんも愛も、お互いに食い下がるわね」

「今回はどうやら勇気くんが居合わせたようですよ。中津さんに連絡をとったそうなんですが」

藤岡は笑う。

「それで、これなのね」

‘岩崎警部の息子’である勇気はここにとって少し特殊な立場にある。元々愛自身の立場も特殊なのだが、警察でもなく、協力者として公表する訳にもいかない勇気は余計に特別な位置にいる。

自分の息子である愛にしてみても、中津にしてみても彼が事件に関わっているのは揉めずにはいられない事柄なのだ。

まして危険が絡む状況ならば余栄に。

不意に伊東の胸ポケットから携帯のバイブ音が響く。

彼はテーブルにコーヒーを置くと軽く断りを入れて携帯電話を取りだした。

「はい、伊東です。……ああ、今ちょうど話していたんですよ」

「勇気くん？」

「そうです。……はい、今中津刑事と揉めていますね、こちらは通常通りです……ああ、なるほど、理解しました、ちょっと待って下さいね。それで、彼のこと、どう思いました？」

彼は携帯電話で話をしながら言い争いを続ける上司の方へと進む。携帯電話を肩に挟み込み、愛と中津の間を引き裂くように両手で押しやった。

その行動に周囲の警官達がどよめく。

藤岡は口笛を吹いた。

「会話中よ、伊東くん」

「何か用ならば後にして下さい」

同時に抗議を入れられるが彼は全く顔色を変えずに愛の目の前に携帯電話を突き出して言う。

「埒のあかない会話はそのくらいにしておいて下さい。緊急を要する電話です」

「誰？」

「出れば分かります。この場合は自分が預かります」

愛は携帯電話を受け取り伊東を睨む。

「いい身分になったわね」

「文句なら後で聞きます。今は電話に出て下さい」

「……」

まだ何か文句を言いたげな彼女だったが、緊急という言葉が気になったのか、すぐに電話を片手に電波の入りやすい窓辺の方へと向かう。

話を途中で中断されてはつが悪そうに中津は溜息をつきながらネクタイを少し緩めた。

伊東は彼の方を見て言う。

「今から猟友会に要請しても早くても明日の朝になりますよね？」

「そうなりますね」

中津は淡々と答える。

「では今晚我々が動いても問題はありませんか？」

伊東の言葉を中津は正確に理解する。

「市民の安全が最優先ならば」

「当然です。では、いいですか？」

「止めても動くつもりならばもう止めても無駄でしょう」

中津は諦めたように言う。

電話から戻ってきた愛が嫌味のようにたたみかける。

「……もつとも、あなたに止める権利はありませんけどね、中津係長」

「それなら早くあなたの‘必殺技’を使いなさい、岩崎警部」

愛は少しむっとした表情を浮かべる。

嫌味よりも「岩崎警部」と呼ばれた事に腹を立てたのだろうと伊東は軽く吹き出す。が、上司二人に睨まれ肩を竦めた。

「七光りは最後の手段よ。……協力をお願いできるかしら、中津くん」

「分かりました。ただし、期限は明日の朝までです。それまでに何

とかしなければ……」

「はいはい、マタギでも何でも呼んで頂戴」

彼女は適当にあしらうように手を振る。

先刻の腹いせだろうか。彼女の性格を理解している中津は軽く肩を竦めた。

愛は伊東に向き直り指示をする。

「伊東くん、真由美と一緒に馬鹿息子たちを保護して頂戴。あの子たち、自分たちだけで何とかするつもりよ」

10 サザナミ

日は堕ち、そろそろ一般家庭は夕食時を迎える頃だろう。

夜勤明けも常務をこなせばさすがに疲労もピークに達する。木村早希はあくびをかみ殺しながらふらふらと家に向かって歩いていった。過酷だというのは知っていたが看護師というのは想像した以上の職業だった。小児病院が少ない今、入院患者の数は異常なほど多い。ベッドの空きも少なく、部屋にギリギリの人数を詰め込んでもまだ足りない。医師はもちろん、看護師の数も足りない。

その職業を選んだのだから文句をいう資格などないが、正直辞めたいと思うことも何度もあった。ここまで疲れて帰ってくるとやはり辞めたいと思うことが多い。

続けているのは子供達の笑顔と感謝の言葉があるからだ。

見返りを求める訳ではないけれど、それが無ければ今も看護師など続けていないだろう。

それに、と早希は思う。

(それに、今辞めたら南条さんと接点無くなっちゃう)

南条太一は南条鈴華の兄だ。鈴華は一年の大半を病院で過ごしている。彼女が入院していると忙しい長兄に変わって週に何度も病院を訪れてくる。このところ鈴華が一時退院を許可されたために、太一と会う機会も減ってしまった。

それが最近早希を気弱にしている原因の一つなのだろう。彼となかなか会えないもどかしい日々を過ごしているうちに次第に看護師を辞めてしまいたいと思うようになってきた。けれど、今看護師を辞めてしまえば彼との接点が完全に消えてしまう。

入院患者の兄である彼に、どうやら自分は恋をしてしまったらしい。

早希は小さく溜息をついた。

少し前までこうではなかった。

太一に会えれば少し嬉しいだけで、ここまで恋い焦がれることはなかった。不安が余計にそうさせているのだろうと思った。

鈴華が退院するその日、もちろん太一か、その上の兄である斎が来ると思っていた。だが、来たのは委任状を持った坂上という運転士の男だった。斎は普段から忙しくしていたから分かるが、彼が来られない日に太一が来ないと言うことは今まで無かった。何かあったのかと尋ねて見たが、運転士は風邪を引いたのだと言葉を濁すように言った。それから彼には一度も会えていない。

彼の身に何かあったのではないかと不安に思う。

不安に思っているうちに自覚した。

自分は、南条太一のこと好きなのだ。

まるで学生のようなだな、と自分でも可笑しくなる。そのくらい純真に彼のが好きになってしまっていた。だから、彼に会えないことが不安なのだ。彼に何かあったのではないかと無意味な心配をしてしまう。

「馬鹿みたい」

彼女は自嘲気味に笑う。

そんなに心配ならば自宅に電話をかけてみればいい。会いたいのならそう伝えてみればいい。気の優しい彼のことだから無下に断るような事はしないだろうと思う。

けれど、やはり怖いのだ。

「？」

視線を少し上げたその時だった。

彼女の視界の端に、赤い影が入り込んだ。

「南条さん？」

彼のことを考えていたから連想してしまったのだろう。視界の端に入り込んだ赤い影が太一のような気がしたのだ。影は目の前の十字路を横切るように道を進んでいたように見えた。

足早に彼女は十字路の所に急ぐ。

何故だか、彼に会える気がしたのだ。

夕食時のせいか人気のない道を覗き込んで彼女は息を飲んだ。
街灯の下に立つのは、太一ではなかった。……人間ですらなかった。

狼のように大きい犬。

明るいライトに照らされてその毛並みは赤く輝いていた。

早希は一步後退した。

(どうしよう……)

不意に思い出す少し前に獣に襲われて病院に運ばれてきた男の子のこと。警察の話では街中で狼のような赤毛の犬に襲われたという。多分、その犬がこの犬だ。

犬はこちらに気が付くと街灯の真下で、飛びかかる寸前のように身を低くして呻り声を上げる。

早希は犬から視線を逸らさないように片手でバックの中を探った。指先にぶつかったのはデオドラントスプレーの缶。武器になりそうなものはそれくらいしかない。

彼女は取り出して構える。

走って逃げれば犬は反射的に追いかけてくる。徐々に後退しているのがいいだろう。万が一襲いかかれた時はスプレーで驚かせた隙に何処かに逃げ込むしかない。幸い住宅街だ。民家に逃げ込めれば何とかなるだろう。

考えた矢先だった。

犬が地面を蹴る。

「!」

動くことも出来なければ、悲鳴さえも上げられなかった。

高く跳躍した犬の身体が早希の上に覆い被さる。

その身体は大きく、早希よりもずっと大きな獣だった。力も尋常ではない。押さえ込むような前足が左肩と肺を強く圧迫した。

「っ……」

息が出来ない。

もがくと、前足が肺から外れようやく呼吸が出来るようになる。

早希はもがきながら唯一自由に動く右手でスプレー缶を犬の頭部めがけて叩きつける。しかし、犬はびくともしない。

もう駄目なのかも知れないと半ば諦めた時だった。

犬の片耳に光るモノを見つける。

それは太一が耳に付けているループのピアス。

「……………な……………ん、じょうさん？」

「……………っっ！！」

呟いた瞬間、犬の呻り声が苦しそうな声に変わる。

自分でも何故そう呟いたのかわからない。

何故か犬が彼のような気がしてならなかった。そんな風に考えてしまうのはおかしいことだが、その時の早希は疲労に加えて動揺していたために正常な考えが出来ていなかった。

殆ど確信をして早希は犬に向かって呼びかける。

「太一さん！」

苦しんでいる。

犬が。

まるで人が顔を覆うように、犬の前足が顔にかかる。よろめくように犬がゆっくりと彼女の上から退いた。

ふらつきながら徐々に彼女から遠のいていく。

「……………太一さん……………」

追いかけようと彼女が動くと、犬が脅迫するように呻り声を上げる。

来るな。

まるでそう言われた気がした。

早希は上半身を起こしたままその場を動けなかった。

やがて赤毛の犬はゆっくりと歩いていく。後ろ姿が闇に飲まれていく。

涙が溢れた。

恐怖や安堵によるものではない。

あの犬が、太一が自分を庇ってどこかに消えてしまうような気が

して辛かったのだ。

ふつり、と何かが切れるように彼女の身体がアスファルトの上に落ちる。

意識が遠のいていくのが分かる。

薄れていく意識の中で彼女は祈る。

彼に何事も無いことを。

南条太一が無事にいることをただ祈った。

11 澱の中に

沈んでいく。

淀んだ澱の中に。

光を見失う。

何も聞こえない。

何も。

「久住」

呼びかけられて明弥ははっとする。

インパクトという力について考え込んでいるうちにぼーっとしてしまったようだ。鈴華が心配そうにこちらを見つめている。

無理しないで下さい、そう言われている気がして、大丈夫だと微笑んでみせる。

明弥は普段と変わらないように振る舞った。

「何？ もう着く？」

「……………。ああ、もうすぐ着く。その前にもう一度確認しておこう」

「う、うん……」

彼は地図を広げて書き込まれた線を示す。

今、明弥達は新しく呼んだタクシーで市が運営する球場へ向かっている。この辺りで一番広く見通しの良い場所はそこか学校のグラウンドくらいしかない。人気の無さや追いつめやすさを比べれば球場の方が良いだろうと彼が判断したのだ。

そこに太一を誘き出し、インパクトを使って元の形に戻すのだと彼は言う。

本当に自分に能力があると自覚できない。けれど、ここまで来たらやるしかないのだろうと思う。

「彼がこのゲートから球場の中に入ったら、俺が行動範囲を狭めていく。お前は彼を止めることをただ強く念じ続ければいい」

「……本当に来るの？」

「来る。水守祐里子のおかげで少し細工を思い付いた。奴がその誘いに引っかかっているなら既にここに向かっていているだろう」

「引っかかっていなかったら？」

尋ねると岩崎は一瞬口を噤み、一拍置いてから返事を返す。

「……お前は、彼に好かれている。だから、どっちにしてもお前を狙ってくるだろう。それは経験済みだと思うが？」

確かに明弥は初めて彼に遭遇した時から狙われている。

犬でさえ空気に紛れた匂いを嗅ぎ分けられる。人狼の嗅覚がどれだけあるのかは知らないが、人間より遥かに優れているだろう。多分、匂いを辿って明弥を狙ってくるのだ。

「……！ 止めて下さい」

彼は急に運転手に向かって叫ぶ。

まだ入り口に到達していない。

車が急停止し、車内が大きく揺れる。

岩崎の瞳は背後の暗がりを見つめている。

「ど、どうしたの、突然」

「……状況が少し変わった。久住、鈴華、お前達二人で先に向かってくれ。俺は後から追いつく」

「ちょ……岩崎君！」

岩崎は一万円札を明弥に押しつけるとそのまま外に飛び出していく。

彼の姿はすぐに暗がりには飲まれて消えた。

※ ※ ※

「眞由美さん」

勇氣は暗がりの中に呼びかける。

タクシーの中に見えたのが間違いでなければすぐ近くに彼がいるはずだ。

こっち、と手を振り呼びかける女装をした男の姿を見つけて勇氣は彼に駆け寄った。

「早いですね。……母から全部聞いていますか？」

もちろん、と彼は頷く。

「勇氣くんのお願いだもの、私大急ぎで来ちゃったわよ」

「伊東さんは？」

「向こうで待機しているわ。警察部隊、いつでも動ける準備出来ているわよ」

「部隊って……よく中津さん説得できましたね」

藤岡は腰に手をあてて遠くを眺める。

「勇氣くんたちが自分たちだけで動くつもりだって言ったらあっさり納得したわよ」

「そうですか」

先刻、勇氣が母親の愛に連絡を取った時、万が一のことに備え警察部隊の編制を要請した。正直こんなに早く来てもらえるとは思っていなかったし、最悪少人数部隊であるゼロ班しか動かないかとも思っていた。

けれども愛が機転を利かせたのだろう。

ただ、中津も勇氣の性格を知っている。自分たちだけで解決しようなどと思うような考えを持っていないことくらい分かっているだろう。ひょっとしたら、騙されてくれたのではないだろうか。

「むしろ愛の方が乗り気じゃなかったわ」

だろうな、と勇氣は思う。

愛はどんな些細な事件でも勇氣が関わりを持つことを嫌がる。しかし超常現象に関わる事件か否かを判断する時、勇氣のような稀な

力が必要になってくる。だからいつも仕方なく協力させたが今回のように明らかにリスクの高い事件では関わらせたくは無かったのだろう。

だが、勇気が珍しく強く押したことを簡単に反対はできなかったのだ。

結局乗り気でもなくとも愛は動いた。

息子としてでなく、超常能力者として信頼されていなければ叶わなかったことだ。

「相方君には私たちが待機していること、教えなくていいの？」

「あいつには……保険をかけていること知って欲しくない」

勇気は少し言い淀む。

へえ、と藤岡はニヤニヤと笑う。

「勇気くんも可愛いところあるのねー」

「違います。久住を本気にさせるためです」

「あらあら、せっかく友達になれそうなのに、それじゃあ嫌われちゃうわよ」

「俺はそれでいいんですよ」

彼が影響の波を出せるか否か、それは半信半疑だ。しかし彼がその力を持っているのは確実だ。今までのことを考えれば彼は追いつめられていないと力を出せない。

警察が控えていることを知れば甘えが出る。

だったら知らせずに追いつめるしかない。

優しいフリをしてこんな陥れるような卑劣な手段に出たと知れば、いくら毒気のない彼でも怒るだろう。

それでも構わないと思った。

例え憎まれる結果になっても、明弥が自覚をして彼自身や周囲の危険が減るのならそれでいいと思う。

今までだってそうしてきたのだから、今更また誰に恨まれても平気だ。

「球場に人狼を追いつ込んで下さい。おそらくもう既にこの周囲には

来ているはずで」

「オーケイ、勇気くんはどうするの？」

「準備があります。久住たちと合流します。万が一の時は合図を……」

送る、という言葉に被さるように球場の中から叫び声が聞こえる。

鈴華のものだ。

血の気が引いた。

「まさか、早すぎる……っ！」

12 終局

「大丈夫？」

手を差し伸べると彼女は礼を言って明弥の手を掴んだ。

球場の使用許可をとっていないために、狭い通路から中にはいるしかない。通路と言っても破れたフェンスを潜ってよじ登る道だ。小学生の頃、この道を使って球場の中で遊んでいて良く怒られた。未だに直っていないのは管理が杜撰なのか、それとも直してもすぐに壊されるせいなのかは分からない。ただ、この通路のおかげで今球場の中に入ることが出来たのは確かだ。

鈴華には少し段差が厳しく明弥が上から引き上げる形で中に入った。女の子の体重を気にするのは失礼かも知れないが、彼女の体重は妙に軽い。明弥の力でも十分引き上げられるような重さだった。

「来て良かったの？」

「はい、太一君は……私の兄ですから」

「心配だよね。俺、頑張るから」

「……大丈夫ですか？」

問われて明弥は苦笑する。

やはり岩崎のようにはいかない。自分では彼女を不安にさせてしまう。

「頼りないだろうけど、出来る限りのことはするから」

「そうじゃないです」

「ん？」

「無理していいんですか？」

していると言っても、していないと言ってもどちらも嘘だ。

明弥は微笑む。

彼女の優しさが嬉しかった。

「正直言うとな、逃げ出したいほど怖いよ。でも、何もしないで後悔するのはもっと怖い。出来る事しないで嘆くのは嫌なんだ」

「久住さん、もしかして……」
彼女が言いかけた時だった。

フェンスに何か叩き付けるような音が聞こえ明弥は慌てて振り返った。咄嗟に鈴華を自分の後ろに隠す。

数十メートルほど離れた先の金網が大きく揺さぶられている。外にあるライトに照らされて、揺さぶっているものの姿が見え隠れした。

赤い毛並みの大きな犬型の動物……太一だ。

「そんな……まだ、早いのに……」

鈴華が怯えたような声をあげる。

密着した身体から小刻みに震える振動が伝わってくる。いや、震えているのは明弥自身も同じだった。

覚悟していた。

けれどやはり怖い。

「鈴華ちゃん」

守らなければ。

「……戻って、岩崎君探してきて」

せめて、彼女だけは。

「早くっ!」

彼女の身体を突き飛ばすのと同時に明弥は真逆の方向に走り始める。

同時に金網を突き破った赤毛が高く跳躍した。

「久住さんっ!!!」

悲鳴のような鈴華の声。

明弥は身を低くして獣の鋭い爪を交わす。頭上を鋭い風が横切った。

どうすればいい?

混乱する頭を冷静にさせようと明弥は再び走る。市営の球場とはいえそれほど広くないグラウンド内を走り執拗に襲いかかる太一の攻撃をギリギリのところで交わしながら、彼が人間の姿に戻ることに

だけを祈り続ける。

強く想う。

戻したいと。太一を死なせたくない、鈴華を悲しませたくない。自分だって死にたくない。

影響の波は出ているのだろうか。

どうしたら彼が元に戻るのだろうか。大柄で怖そうだけど、優しい目をした彼に、どうやったら戻るのだろうか。

「太一君、止めて!!」

泣き叫ぶような声。

鈴華が泣いている。それでも太一は反応を示さなかった。

まるで獲物を追い立てるように太一は呻り声を上げる。遊びはおしまいだ、そうとどめを刺すことを宣言するような声。

振り向いた瞬間、身体に大きな衝撃を覚える。

牙しか見えない。

「……っ!」

明弥は目を瞑る。

「夜芸速の 十拳剣 此れ火産霊と成り、!!」

突然、岩崎の叫ぶ声が聞こえ太一の身体が炎に包まれる。

目を開くところらに向かつて走ってくる彼の姿が見える。

何が起こったのか明弥が理解するよりも早く。彼は太一に向かつて体当たりをする。炎に包まれていたように見えた太一は、ひるんだ様子を見せていたが、その身体の周りに炎は見られなかった。

大きな獣の身体は激しく飛ばされた。

岩崎は明弥を庇うように前に立ちながら何かを呟くように言う。

「千早振る神のすまいは吾が身にて いで入る息もうちそとの神、」

独特な節を持った声だった。

いつもの岩崎の喋る口調や声質とも違う。

不思議な韻律だった。

彼は手のひらに何かを載せてふっと息を吹きかける。細かく刻ん

だ紙のような白いものがふわりと空中に飛び散る。

その細かい白い破片は地面にゆったりとした円のような形を描く。彼の手のひらは火傷でもしたかのように赤く爛れていた。

明弥は目を瞬かせた。

「ひと ふた み よ い む な な や ここの たり、」

岩崎の向こう側で太一が起きあがる。

彼は空中に何か描くように手を動かした。

「ふるへ ゆらゆらと ふるへ、！」

「！」

明弥は覚えず耳に手を当てた。

彼の言葉に呼応するようにあたり一帯に耳鳴りのような甲高い音が響き渡った。空気が震えているのだ、と明弥は思う。

ぐあああ、と太一が今までにない苦しげな声を上げた。

「久住！」

促すように彼が叫ぶ。

やれ、と言っているのだ。

明弥はとにかく強く念じる。

だが、

「岩崎君！」

目の前の岩崎の上に、狂ったように吠えながら太一がのしかかる。だめだ、間に合わない。

明弥は頭の中で悲惨な光景を連想する。

獣に頸動脈を噛まれ目を剥く彼の姿。

そんなの、嫌だ。

何かが。

自分の中からせり上がってくる。

吐き気のように、

そしてそれは引っ張り上げるように明弥の意識を飛ばす。

見えたのは底なし沼のような黒い影だった。

全てのものを引きずり込もうとするように混沌とした影から触手が伸びる。

そこから手が生えている。

否、影が誰かを引きずり込もうとしているのだ。

もがき苦しむような手を明弥は掴んだ。

離れたら終わってしまう気がした。

ずるずるとそれは明弥までも飲み込もうとするように影が迫ってくる。

明弥の手が半分埋まった。

黒い影次々と伸ばされ明弥の首を掴む。

それでも手は離したくなかった。

（これは、太一さんなんだ）

離れたら明弥は助かる。

でも、太一さんは間に合わない。

諦めたくない。

今、彼の手を、残された意識を握っているのだから。

……ズミ

声が聞こえる。

誰から自分の手を掴んだ。

引き上げようとするように。

（いける）

明弥は渾身の力を込めて太一を闇の沼から引き上げる。

強く、何かが輝いた。

「久住！」

明弥ははっとした。

自分の肩を掴んで揺さぶっている男の姿が見えた。

何が、どうなった？

「……いわ……さき、君？」

呼びかけると彼ははっとしたように息を吐く。

気が付くと球場の中には沢山の人がなだれ込んできていた。

作業服を着ている者もいれば、警察の制服を着ているものもいる。

いつの間にこれだけの警官がここに着たのだろうか。

「……太一さんは！？」

辺りを見ても赤毛の男の姿は見えない。

その代わり警察官が何かを調べている姿が目に入る。

まさか、と不安がよぎった。

女刑事が溜息をつくように言う。

「大丈夫よ、今病院から連絡があって命に別状は無いらしいわ。鈴華という女の子も一緒よ。……言っておくけど、獣医ではないわ」

彼女はそれだけを言い明弥から離れていった。

明弥は岩崎を見る。

「それじゃあ」

「ああ、ちゃんと人の姿に戻った」

「……良かったあ」

言うと岩崎が吹き出した。

明弥は目を丸くした。

こんな風に笑った顔を見たのは初めてじゃないだろうか。

「お前、人のことばっかだな」

「そ、そうかな？」

「何はともあれ、お前、よく頑張ったよ。……ありがとう」

「え？ あれ、お礼言うの、こっちだよ」

彼は首を小さく振って明弥の肩に額を押し当てた。

一瞬泣き出したのかと思って戸惑うがそうでは無かった。彼はお

かしそうに笑いながら肩を振るわせている。
その様子がおかしくて明弥も吹き出した。

こうして、明弥の長い一日はようやく終わりを告げた。

1 智慧者

書類をまとめてクリップで留め処理済みのボックスに入れる。

軽く目を通し、印を押すだけの書類を処理するのはそれほど労働にはならないが、出張でたまった仕事分量を考えると少しの時間も無駄にしたくはなかった。

斎はメガネの中指で押し上げて次の書類を手取る。

こんこん、と控え目なノックの音がして彼は返事を返した。

「どうぞ」

失礼します、と言って入ってきたのは秘書の女ではなく南条家に昔から務める坂上だった。

彼は斎が生まれるよりも前から南条家に仕えている。身分制度が無くなって久しい現代社会においても、まだ古い家の周りにはその家に対するある種崇拜のような行動を取るものがある。坂上もそう言った昔の身分を重用視する節があった。

幼い頃から父親に従う坂上の姿を見ていた斎は、てっきり彼は父親の人柄に惹かれているのだろうと思ったが、父親が床に伏せて斎が家主として働くようになる坂上は斎の側で働くようになった。

その時初めて坂上が人ではなく家に仕える人間だと言うことを認識した。

坂上は入り口で頭を下げる。

「斎様、警察の方がお見えになりました」

出張先で坂上に連絡は受けていた。

彼が不在の間、坂上が滞りなく対処をしていたようだが、警察はやはり斎と話がしたいとアポをとってきた。忙しい斎であったがこの状況で拒むわけにもいかない。仕事の合間の時間ならば構わないと了承したのだ。

ほぼ予定していた通りの時間に、斎は好感を覚えた。

「ありがとうございます、通して下さい」

はい、と返事が返る。間もなく小柄な女の刑事と、背の高いがっしりした男の刑事が入ってくる。二人ともまだ若く同輩のように見えたと、男の態度で女が上司であることが分かる。

女性の年齢は分かりにくい。おそらく斎が最初に思った年齢よりも遙かに上なのだろう。

「はじめまして、一課の岩崎です」

「伊東です」

二人は手帳を見せながら軽く会釈をしたが、その視線は斎から外されることは無かった。彼らの後ろで坂上が静かに廊下に出てドアを閉めるのが見えた。

斎は微笑んで挨拶を返した。

「南条斎です。弟がお世話になったそうですね。ありがとうございます。ました。どうぞあちらに」

応接用のソファを示すと二人はソファに腰を下ろした。

きよろきよろと見回す様子は見せなかったが、二人とも確実に部屋の中を観察している。眼光の鋭さはさすが刑事と言うところだ。

間髪入れずにやって来た秘書の女がお茶を三つ運びテーブルの上に並べた。

「随分お忙しいようですね」

女が言う。

「表向きには科学研究所だとか」

初めからその話題が来ると思っていたいなかった斎は多少面を喰らう。秘書は無言のままお辞儀をして部屋を出て行く。

「表向き、というのは少し語弊があるようですが」

斎は驚いてしまった表情を隠すように苦笑いを浮かべる。

「実際に科学の研究も行っていますから嘘はないでしょう。研究する対象に超常現象に関することが混じっている、それだけのことです。昨今新興宗教などの起こした事件の影響でカルトを思わせる単語は嫌われますからね。我々もそれと同じと思われては心外です」

斎が責任者を務めるこの研究所は、事件や事故などを含め様々な

現象を科学を用いて解き明かしている。彼らと会うのは初めてだったが、警察関係者が捜査協力を求めてここを訪れることは多い。公開はしていないが、超常現象に関する研究も行っていた。

当然警察もそれを知っていただろう。あえて確認を取るのはいかを探っているのだ。斎は言葉に注意しながら話を進める。

「太一さんとは血が繋がらないようですね」

「ええ、弟は継母の連れ子です」

「人とは違うことを知っていましたか？」

「はい、知っています。義母は再婚後すぐに亡くなったので、彼がそうになった経緯は知りませんが子供の事から人と違うことは認識していました」

「よく、一緒に暮らしましたね」

鋭い言葉だった。

怒り出す者もいるだろう。だが、斎は冷静に答える。

「私も子供でしたから、怖いと思うよりは、格好良い、を思っていました」

「妹さんとは随分と年が離れていますね」

「彼女は父の妾腹の子です。親子ほど年が離れていますが、血を分けた妹です」

「複雑な家庭環境なんですね」

女は淡々と言い放つ。

挑発をしているようだ。斎は瞳の奥を鋭くさせた。あまりにも率直すぎる質問に激昂して何か重要な事を漏らすことを待っているのか、あるいは動揺させて聞き出しやすくしているのか。

「何か、私に聞きたいことがあるようですね」

斎は敢えて直球を投げかける。

女は顔色を変えずに答える。

「回りくどいことは嫌いですか？」

「はい、時間の無駄と思います」

「ならば単刀直入に聞きましょう。あなたは最初の獣化の時、手早

く対処しました。その時に、あなたは彼が再び暴走する危険性を認知していましたね。それなのに何故今回、彼を野放しにするような行動を取ったのですか？」

なるほど、と斎は思う。単刀直入と言ったものの、彼女が本当に聞きたいのはそこではないのだろう。

この岩崎という女刑事、なかなかの智者だ。他の刑事と同じように見ていれば痛い目に遭いそうだ。

「私は弟を普通の人間だと思っています。檻に閉じこめる事はしたくありません。それに今回は私自身油断をしていました。今までこういう事はありませんでしたからね」

「前例があれば油断はしなかったと」

「どうでしょう。私は弟を信頼しています。それも油断の一因になった可能性は捨て切れません」

彼女はじつと斎の瞳を見る。

斎は逸らすことなく見つめ返した。

お互いに探り合うような一瞬。

観念した、という風に斎は笑って見せた。

「貴女は、この研究所で行われた実験の結果、太一のような子が生まれ、鈴華もまたその犠牲者であると思っていますね？」

「そう言った前例があるならば疑うこともあります」

「私を捕まえるべきと考えているのでしたら、何か理由をつけて拘束するのが宜しいでしょう。大人しくするつもりはありませんが、逃げたり隠れたりするつもりはありません」

「認めるのですか？」

斎は笑みを崩さないまま首を振る。

「いいえ。ただあなたの言動からはそうしたいように思えます。実際私は太一の血液を採取し、研究をしています。それを人体実験と思われても仕方のないことだと思いますが？」

何かを言おうと口を開きかけた女刑事を、隣で黙っていた男が止める。

邪魔をするな、と言うように岩崎が睨むが男は構わずに口を開く。

「気を悪くされたのでしたら申し訳ありません。我々は他の捜査班のように犯人を挙げることを目的にしているわけではありません」

男の外見は警官と言うよりはヤクザかマフィアのように見えるが、岩崎の印象が鮮烈すぎるために、むしろ優しい印象を覚える。

だが、この女刑事と組んでいる彼もまた相当なのだろうと思う。

「人は禁忌の力を持てば使いたがる。大惨事に繋がりがねないサインがあれば見逃すことは出来ません」

「同感です」

「いずれ、あなたに協力を仰ぐこともあるでしょう。我々は超常現象に関しては素人ですから」

やはり彼もまた食えない男だ。

斎は息を吐いてソファに寄りかかり、にこりと笑って見せた。

「その時は、出来得る限りの協力はさせて頂くつもりですよ」

2 四海波静か

入学式の翌週月曜日。

あの一日がどんなに異常でも、今はいつもと変わらない平穏を取り戻している。それは明弥が楽天的な性格のせいもあるだろう。あんな事件の後だから興奮状態にあってもおかしくないが、小さい頃から事件に巻き込まれてきた明弥にしてみれば今更騒ぎ立てる事でもなかった。

自分自身が妙な力を持っていた事には驚いたが、何故だかすぐに受け入れることができた。それも自分なのだと。

「おはよう」

明弥は教室の端で外を眺めている岩崎に声をかけた。

「ああ……おはよう」

あれから数日、お互いに事情聴取や学校のことなどありちゃんと話をする機会がもてなかった。挨拶程度の言葉は交わしたが、何だか久しぶりに幼なじみに会うような気がして少し気恥ずかしかった。

「大分、疲れただろう。聴取」

「そんなこともないよ、俺結構慣れているから」

「そうだったな」

岩崎は優しい笑みを浮かべた。

あれから彼に睨まれたりしない。こういう彼が本来の彼なのだろう。落ち着いていて優しい。

明弥は岩崎の手に視線を落とす。

「その手大丈夫？」

「ああ、俺はその……治りが早いから」

言った勇気の左手には包帯が巻き付けられている。あの夜、爛れているように見えた彼の手はやっぱり火傷を負っていた。

何をしたのか正直まだよく分かっていないが、明弥を助けるため

に負ったことは分かる。彼はちよつと失敗しただけだから、気にする必要はないと言ったが、やはり気にかかる。

「ねえ、それさ……えつと、ふ……巫術？　とか使ったせい？」

人が周りにいないことを確認して小声で聞くと岩崎は驚いた風を見せた。

「藤岡さんっていう刑事さんにも色々聞いて、あれからちよつと調べたんだ。色々ありすぎて全然わからなかったんだけど……岩崎くんってそう言う人にはない力、持っているんだよね？」

「あ……ああ、まあ」

「凄いなあ、そういうのってやっぱり修行とかするの？」

岩崎は嫌そうにそっぽを向いた。

「止めてくれ、そう言うの、嫌いなんだ」

「どうして？　格好良いと思うけど」

「……格好悪いだろ。へたをすれば頭がおかしい奴だって思われる」

「でも、実際に見ればみんな信じるよね？」

彼は複雑そうな笑みを浮かべた。

それより、と彼は話題をすり替えるように言う。

「お前、気にしていないのか？」

「何を？」

「俺はお前をわざと危険にさらしたんだ。聞いただろう藤岡刑事に」

「ああ、うん」

何故か女言葉を使う刑事に岩崎が取った行動の全てを聞いた。

正直驚いた。

だけど、驚いたのはあの短時間で岩崎がそれだけの事を考えついたと言うことで、怒るようなことではない。確かに明弥は危険にさらされたかもしれないが、結局岩崎に助けられて軽い擦り傷程度の怪我しかしなかった。

「何を気にするの？」

尋ねると岩崎は瞬いた。

「何を、っってお前……」

何か言いかけた彼は、顔を手で覆いうつむき呆れたように息を吐く。

「お前やっぱり馬鹿だろ」

「また言われた」

明弥は口をへの字に曲げた。

岩崎から見れば確かに自分は馬鹿かもしれないが、それだけ馬鹿馬鹿連呼されるときさすがに複雑な気分になる。最も、彼は馬鹿にするつもりなどないようだったが。

ああ、そうだ、と岩崎が顔を上げる。

「あいつ、退院した」

「太一さんが？　よかった。あ、でも警察とかの方……大丈夫なの？」

彼が人狼と知っているのはごく僅かな人間だが、彼を拘束しようとする話もおかしくない。もう暴走の危険は無いだろうという話だったが、警察がそれで納得するとは思えない。

退院出来たとしても、自由に行動出来ないとすれば可哀想だ。

「一応しばらくは監視が付く。っていつても、付きっきりって訳じゃないが。定期的に彼の診断をすることで納得をした。むしろ、お前だ」

「ん？」

「気が付かなかったか？　警察がお前の周りをうろついていただろう？」

ほら、と岩崎は窓の外を示す。

校門から少し離れたところに車が止まっている。パトカーではないが、警察関係者なのだろうか。

「護衛みたいなもんだ。南条太一は暴走した時にお前を狙う。それが分かっているからお前の安全を確保するために暫く付くだろうな。気を付けろよ、煙草なんか吸ったらすぐ補導されるからな」

「吸わないよ」

吸ったこともないし、吸いたいとも思わない。

飲酒は……少しだけ興味あるが。

「アキちゃん、来てる？」

明るい声が聞こえて明弥は微笑んだ。

教室の後ろのドアからトモミが顔を覗かせた。

「来てるよ、おはよう」

言うのとトモミは教室の中に入ってくる。

「おはよー。ねえ、朝から悪いんだけどさ、英語の辞書ある？」

「ん、あるよ。何、忘れ物？」

「昨日家に持ち帰って置いて来ちゃってさー、一限だからすぐに返すから、お願い、貸してー」

両手をあわせて懇願するトモミに明弥は笑う。

「じゃあ、今度何かおごってよ？」

「おっけー！ マックで良いよね？ 奮発しちゃうよ、この間千円分の商品券当たったんだー」

相変わらず運が良い。

明弥は辞書を彼女に手渡す。その様子を見ていた岩崎が窓に寄りかかりながら小さく笑う。

「お前ら、本当に仲がいいんだな」

「当然！ ってか、岩くんおはよう」

「ああ、おはよう」

「んー……？ あれ？ 何か二人急に仲良くない？」

辞書を胸に抱いて彼女は交互に二人を見比べる。

明弥は笑む。

「当然だよ。友達だから、ね？」

同意を求めるように岩崎を見上げると、彼は肩を竦めた。

「そう……らしいな」

「らしい、って」

「そう言う素直に頷かないところ、岩くんっぽいよね。素直じゃない。ツンデレタラシ」

「何だよそれ」

岩崎がトモミを静かに見下ろした。

「べっつにいー」

トモミは笑いをかみ殺したような表情であさつての方向を向く。
中学でもこんな感じだったのだろうか。

何だか少しうらやましい。

「でも、いいなー、私もこっちのクラスが良かったー」

トモミは訴えるように頬を膨らませる。

「こっちの方が面白そうだし、担任千野先生だし。あーあ、なーんか面白いことでもないかなー」

「トモちゃんの方、穂高先生だっけ？」

「そうそう。私、女の先生と相性悪いからなー……つとと、授業始まるから行くね。じゃ、後で」

辞書ありがとう、と言い残して彼女は廊下へと飛び出す。

時々嵐のようだけど、トモミは底抜けに明るくてこちらにまで元気をくれる。いつも笑っているひまわりのような存在だ。

ずっと変わらずにいてほしいと思うのは傲慢だろうか。

「久住」

「ん？」

「気を付けろよ」

岩崎は顎で廊下をしゃくる。

こちらを睨み付ける安藤の姿が見えた。

ちやうど授業開始のチャイムが鳴る。慌てて教室に戻る生徒の波に紛れて、彼の姿はすぐに見えなくなった。

3 嵐の前

「コーヒーのおかわりいかがですか？」

胸に鮫島と書かれた名札を付けた女が控え目な口調で尋ねる。

太一は片手でそれを断った。

「連れが来たら頼むよ」

「かしこまりました」

珈琲屋orange猫は落ち着いた雰囲気のお店だ。

クラブのような派手で騒がしい店も好きだが、実はこういった静かな店の方が好きだ。穏やかで落ち着いた気分になれる。

店内を流れるリムスキーの曲を聴きながら太一は窓の外の通りを眺める。

短期間に色々な事があった。

こういった性格だから自分自身があんな形で暴走したことはあまり気にしてはいないが、鈴華に泣かれた事は正直堪えた。元々自分が泣くと他の人に余計な心配を掛けるからと滅多に泣かない子だ。それが目覚めたばかりの太一を前にして人目も憚らず泣いて怒ったのだからよほど心配をかけたのだろう。

彼女の為なら何だってすると心に誓った自分が彼女を泣かせるとはあまりにも粗末な結果だ。

からん、とドアベルが鳴る。

入り口を見やるとちょうど女が入ってきた所だった。彼女は店員に待ち合わせであることを告げるとすぐに太一の姿を見つけた様子が近付いてくる。

「ごめんなさい、待ちましたか？」

「いや、忙しいのにわざわざ悪かったな」

「いえ、誘って下さってありがとうございます」

そう言って彼女は、木村早希は太一の向かい側に座った。

白衣以外の姿はあまり見たことがない。

薄いピンクのシャツは彼女によく似合う。新鮮な感じがすると同時にどこか気恥ずかしい感じもした。

「体調、もう大丈夫なのか？ 倒れたって聞いたが」

言うと彼女は驚いた様子を見せる。

「良く知っていますね。少し疲れがたまっていたみたいです。おかげで変な夢見ちゃって……」

「変な夢？」

「笑いませんか？」

「場合によるな」

からかうような口調で言くと彼女は少し躊躇って苦笑した。

「南条さんが赤毛の犬になる夢です」

「……！」

太一は絶句する。

その夢は笑えない。

早希は顔を赤くして息を吐いた。

先に注文をしてきたのだろう。彼女の目の前にコーヒーが運ばれてくる。太一のカップにも三杯目のコーヒーが継ぎ足された。

「……呆れてますね」

「あ、いや……」

「いいんです、自分でも馬鹿げてるって思いますから。それより用って何なんですか？」

早希はコーヒーカップに手をかけて太一の方を見る。

彼はポケットから小さな箱を出して彼女の前に置く。

不思議そうに彼女が見つめた。

「やる。滅茶苦茶遅くなったが、バレンタインの礼。病院で渡すわけにもいけないからな。……実は鈴華に怒られたんだ。お返しくらいちゃんとしろって。俺そう言うところ無頓着だから、その……悪かった」

「そんな、良かったのに」

言いながらも彼女の手は箱に伸びる。

「でも、ありがたく頂きます」

笑んだ彼女を見て太一はほっとする。

本当に今更だから突き返されることも覚悟していたのだ。

「あけても良いですか？」

「気に入るかどうかしらねーぞ」

大丈夫です、と彼女は言っただけ箱を開く。

小箱の中には先日買った花のモチーフのネックレスが入っている。

彼女はそれを取りだして目を瞬かせた。

「……南条さんが選んでくれたんですか？」

「そう言うのは、邪魔にならないって聞いたから。あんたに似合いそうなの買ったんだが……気に入らなかつたら捨てていいからな」

彼女は首を振る。

「いいえ……！ 凄く嬉しい……ありがとうございます」

「なら、良かった」

太一は微笑んだ。

早希は何故だか少し驚いた様子で太一の方を見る。

「……どうした？」

「いえ。少し、雰囲気が変わったって思っただけ」

「そうか？」

太一は顎に手を当てる。

実際少し心当たりがあった。暴走して、鈴華に泣かれて、斎にも散々嫌味を言われて、ちょっと悩んでいたことをはっきり決めたというせいがあるだろう。

元々悩むより先に行動するような性格だ。

うじうじ悩んでいるのが馬鹿馬鹿しくなったというのが本音だ。

雰囲気が変わって見えるのはそのせいだろう。

早希はにこりと笑う。

「今の方がずっと南条さんらしくていいですよ」

「そうか」

太一はちらりと笑う。

彼女のことは多分嫌いではない。どちらかと言えば好きな方になる。彼女といると暖かい気分になれる。ただ、鈴華が何よりも大切な今は、それ以上のことは考えられなかった。

不意に鼻につく匂いを感じて太一は顔を外に向けた。

人間より敏感な嗅覚が窓越しに微かに焦げるような匂いを感じ取る。

「……どうしましたか？」

「いや、今……」

言いかけた時、向かい側の建物の三階の窓ガラスが吹き飛び火の手が上がった。

店の中が一時静まりかえり、ざわざわと騒ぎ出す。火の手が上がったビルの店舗からは雪崩れ出るように人々が飛び出してくる。まるで生きているかのような炎が、三階の窓を突き破り赤黒い炎を上げる。

太一は奇妙な気配を感じて視線を人混みの中に移す。野生の勘が、何かを警告するように働いた。

逃げまどう人々に紛れるようにしながらビルから遠ざかっていく影。四十代前後の背の高い男。他の人とは違う不自然に冷静な態度。
(放火か?)

太一は立ち上がった。

早希に何か説明するよりも早くに店を飛び出す。店員の女にぶつかったためにカップが落ちて割れたが気に留めていられなかった。

あの男を捕まえなければ。

火事現場であんな不自然な態度を取るなど、疑って下さいと言っているようなものだ。太一の足ならばあの男を捕まえるのは容易い。店を出ると焼け焦げたような煙の匂いが鼻を刺激する。太一は鼻を押さえながら男の姿を探した。駅方面にゆっくりとだが確実に逃げる素振りの男。微かに煙以外の何かの香りを感じ取る。店の前を

横切り男に向かって走り出した太一の耳が細い鳴き声を聞き取る。

見上げたビルの二階。

取り残された子供。

「……ちっ！」

迷っている場合ではなかった。

太一は既に火の手が回り始めた一階店舗に飛び込む。

店の中はもっと酷い匂いがしている。スプリンクラーが回り始めていたが、既に火の勢いの強い今となっては無意味だった。見回した店内に取り敢えず人の気配がない。太一はそのまま奥の階段の方へ急ぐ。

一階と二階、そして三階まで繋がる階段は既に火に飲まれている。崩れた壁が邪魔をするように階段に覆い被さっていた。

びき、と彼の腕が音を立てた。

腕から指先に向けて筋肉が躍動する。逆立つような赤毛が手を覆った。爪が鋭い刃物のように輝いた。

勢いよく彼は振り下ろす。

ぶん、と鋭い音を立てて崩れた壁が粉碎される。人が通れる程の炎のアーチが作られる。

太一は常人を越えたスピードで二階へと駆け上がる。

窓辺で泣き叫ぶ小さな子供の姿が見えた。

がらがらと再び壁が落ち、退路がふさがれる。

太一は走って子供を後ろから抱き上げた。

一階には幌の様な屋根があったはずだ。

落ちれば助かる。

万が一にも幌が焼け落ちていても、太一の身体をクッションにすれば子供に衝撃は少ないだろう。万一怪我をしたとしても、ここで焼け死ぬよりはマシなはずだ。自分の身体能力ならば助ける自信はある。それに、人狼の強靱な肉体ならば二回程度の高さから落ちて命を落とすことはない。

迷う所ではなかった。

「歯を食いしばれ」

太一は子供に言い聞かす。

驚いたような大きな瞳が太一を見、そして頷いた。

下を確認することなく彼は子供を抱えて二階から落ちる。

抱きかかえた子供が強ばるのを感じた。

何かが当たる衝撃。

さらに身体が下に沈む。

屋根はまだ焼け落ちていなかった。

幌状の屋根に包み込まれて太一と子供は地面へと落ちる。

周囲が悲鳴の様な声を上げ、そしてざわめいた。

「南条さんっ！」

悲鳴を上げて近寄ってくる早希の姿を複雑な視点から見上げる。

子供は無事だ。

「応急処置を」

「南条さんはっ」

「俺なら大丈夫、子供が先だ」

分かりました、と頷いた彼女に子供を預け、太一は他の大人達に助け起こされるようになりながら身体を起こす。

そこにはもう男の姿はない。

（子供が助かったんだ、贅沢は言えねえな）

太一は僅か自嘲するように口の端を上げた。

4 狂った炎

男は駅の中に入った。

電車に乗るためではない。電車を待つ人に紛れる為だ。

駅の中では例え走っても、立ち止まっても、辺りを見回しても違和感を覚える者はそれほど無い。

駅員以外の顔ぶれはすぐに変わるし、あまり長時間居座ったり不穏な動きをしない限り誰かに顔を覚えられる心配はない。

彼は改札周辺に設置された防犯カメラに注意しながら自動販売機の影で立ち止まった。人か電車を待つふりをして自動販売機に寄りかかった。

「有信」

声を掛けられ男の心臓は強く鳴る。

知った男の顔を見つけて、彼は表情を陰しくさせた。

「タケ」

かつての愛称を呼ぶと男は口の端を上げて笑う。皮肉っぽい笑いは彼独特のものだった。以前と変わらない癖を懐かしく思うよりも、不自然さに不安な気持ちになった。

彼と最後に会ったのは十年以上前だ。それなのに彼の外見はそれほど変わっていない。無精髭のせいで顔の輪郭が曖昧になってしまっているためだろうか。もう五十近いはずだが、今の自分とそれほど変わらないような年齢に見える。

有信自身が長身のせいもあるが、背の低い彼とは頭一つ分の差が出来る。圧倒出来るほどの差がありながら彼に恐怖心を抱くのは狡猾な性格を知っているからだ。そして頭の回転も速い。正直なところ敵にも味方にもいて欲しくない男だ。

関わりたくはない、と言うように駅の外へ向けて歩き始める。

予測が付いたことだが、タケは有信の後を追いかけるように続く。振り向かずともニヤニヤと笑っている様子が見えるようで酷く嫌な気分になった。

「いつ戻ってきたんだ、アリ？」

「答える必要はないだろう」

「ご挨拶だな。俺はお前の兄のようなものだろう？」

手のひらに爪が食い込む。

挑発に乗ってはいけない。

「兄弟になった覚えはない」

「何だ、自分から行方知れずになった割に探さないでいたことを怒っているのか？ 捜しに来てやっただろう、これだけ火災が頻発してあれば否が応でもお前を疑う。もっとも、お前の生存を信じていたからこそだがな」

くつくつとタケは笑う。

有信は彼を睨んだ。そしてすぐに挑発に乗ってしまったことに気が付き視線を逸らす、それは逆効果だった。

タケはおかしそうに笑ってみせた。

「一連の、お前なんだろう？」

「俺は知らない」

「火災現場の周辺うろつけばお前に会えると思っていたよ。なあ、有信」

タケの目つきが険しくなる。

脅すような低い声で有信の耳元で囁いた。

「……妻を焼き殺した狂炎が。この街に戻って何をするつもりだ？」
有信は目つきが鋭くさせる。その瞳の奥が燃えるような熱を帯びる。

タケは間合いを取るように有信の側から離れた。

駅の中に進む人々は今にもケンカを始めそうな二人の雰囲気、関わる事を嫌って少し間を取って歩いていた。訝しんで立ち止まる者は無かった。

それでも有信は顔を隠すようにして地下道への階段を下る。

なおもタケは執拗に追いかけてくる。

こういう男だ。

おそらく今まで有信が何処にいたのかも見当が付いているのだろう。そしてこの街に戻ってこることも確信していた。だからこそ、火災というキーワードを見つける度に有信の情報を探った。

そしてどこからか手に入れたのだろう。

自分が、この辺りをうろついていると言う情報を。

良く言って根気強い性格のタケは、砂山の中から一粒の砂金を探すのも躊躇わない。そして最終的にはちゃんと見つけてしまうような奴なのだ。

だから厄介なのだ。

「俺には焼き殺される趣味はないな」

「なら、俺とはもう関わるな」

「そう言う訳にもいかねーんだよ。……なあ有信、お前の子供、西ノ宮の制服結構似合っていたぜ？ 親はなくても子は育つんだなあ」

「……っ」

「顔色が変わったな。女房殺して平然としているお前でも、子供は可愛いようだな。まあ、確かに可愛いよ。俺がお前の友達だって言ったらあっさりと信用してくれたよ。タケおじさんって無邪気に笑ってたな」

「何処まで、お前らはっ……！」

有信はタケの襟首を掴んだ。

有信の右手には古い傷跡があった。手の平と甲、その両面が爛れたように皮膚が引きつっている。十年以上昔の古い火傷の跡だった。皮膚移植でもない限り、元のように直ることも知らない呪詛のよな傷。

タケはそれを見つめ、少し嫌な顔をしながら邪険に払いのけた。

「あれと俺を一緒にするな。言っておくが俺はお前もあいつも嫌いだよ、有信」

「……」

「どちらかと言えばお前の方がマシというだけだ。どうせ手を組むならまだマシな方がいいだろう？」

襟首を直しながら男は言う。

「俺もこの十二年、黙って見ていた訳じゃない。………いいか、直接的に言ってやろう。俺はお前みたいな力はねえ、お前には俺が培ってきた情報網と人脈はねえ」

有信は鼻先で笑う。

「……前の手駒になれ、と？」

「違うな。お前が欲しい情報の代わりに、ちよつと手伝って欲しい事がある。むろん、お前が本気で否というなら強要するつもりはない」

「……」

強要するつもりはないと言ったものの、彼に拒否権など用意されていなかった。

子供のことを口にした以上、タケは人質を取っているようなものだ。おそらくこの男のことだ、自分自身に何かあれば見せしめのように子供に危害が及ぶように仕組んでいるだろう。

能力を知っている彼が、何の保険も無しに交渉をしにくとは思えない。

そして、おそらく有信の考えがそこまで及ぶことを考えている。

やはり敵にも、味方にもいて欲しくない男だ。

本気で仕留める気があるのなら、差し違えるつもりで一撃でいかなければこちらが痛い目を見る。

「……お前、何をするつもりなんだ？」

「過去の亡霊共を片づけて住みやすい環境を作るのさ。あながちお前も無関係とは言えんだろう」

有信は男を睨む。

彼の言う言葉を迂闊に信用は出来ない。だが、こういった言い回しをする以上、有信にとっても全てが不利益に繋がるわけでは無さ

そうだ。

味方にいるうちは手出しをしない。そう言う男だ。
もつとも、彼が既に敵ならば話は違うのだが。

「……いい目になったなあ、好きだぜその狂った男の眼。それならあの凶眼にも対抗出来る気がするぜ」

にやりとタケが笑みを浮かべる。

勝利を確信するような自信に満ちた微笑み。

選べない。

選択肢が残されていない。

「答えを聞こうか、久住有信。最上の選択をしろよ？」

5 誰も、悪魔から逃げられない

立ち入り禁止の黄色いテープが張り巡らされたのは、放火の疑いがあるからだけではなかった。五階建てのビルの半分以上を焼き尽くした火事だったが、上二階は空き店舗となっていたために、奇跡的に死者はなかった。

だが、遺体は発見された。

司法解剖の結果を待たなければならないが、死因はおそらく出血多量。

火元と思われるその遺体には複数の刺し傷があった。

状況から判断すると男はこのビルの一階から三階までのレストランカフェを経営する柴田という男。従業員の話からは責任者でありながらもあまり目立たない印象の男だったと言う。暗く怖い印象を覚えたものさえもいた。三階奥のスタッフルームで商品の発注や売り上げの管理をしているために店の方には滅多に顔を出さず、そのためか良い噂も悪い噂も特に聞かなかった。

「目撃者の証言によると、男は奥から持ち出した灯油を頭からかぶり自らの身体にナイフを突き立てて火を放ったそうです。三階の燃え方が酷いのは灯油がまかれたせいですね」

伊東はしゃがみ込んで現場の様子を見る愛に告げる。

彼の手には手帳が握られている。彼女が現場に到着するまでに聞き込んだことの全てが書かれていた。

ゼロ班は表向きには存在しないことになっているために、彼らは強行犯係に所属している事になっている。超常現象が関わる事件を扱うのだ。まさか警察が超常現象を信じていると発表するわけにも行かず隠されている。

本来ならば殺人が疑われる時以外では強行犯係が火災犯を追うこ

とは少ない。だが、一連の放火事件から無理に関係があるとねじ込みゼロ班はこの火事に介入した。南条太一が関わったと聞いて見過ごせなかったのだ。

ゼロ班は少し特殊な権限を持っている。それでもこの特殊捜査班の介入を良く思わない者も多い。愛が本来ならば課長となってもおかしくない「警部」の肩書きを持っているのも、他の事件に介入する際に余計な諍いを少なくするためだ。

「それは自殺ということ？」

愛は少し考えながら問う。

この件は今までの火災とは無関係だろうか。

「それが少し妙なんですよ。軽く調べただけなんですが、特出した自殺の原因と思えるものがありませんでした」

「突然死にたくなる症候群？」

「何ですか、それは」

「若い子と、中高年くらいに多い病気。何か突然訳もなく死にたくなるらしいわ」

「そのまんまですね。その辺の事情は当人しか分からないのでしょうが、柴田は自殺する直前まで誰かと会っていたそうです。ちょうど、この辺です」

伊東は焼け焦げたテーブルの辺りをしめした。

原型は止めていないものの、配置からそこに四人がけのテーブルとソファがあったことが推測出来た。

「この辺で誰かと話をしていたそうです。観葉植物の影になって顔は見えなかったそうなんですが、向こう側に座っていた主婦達が長身の男だったと証言しています」

「防犯カメラは？」

「これも妙です。火災発生の一時間ほど前に、店舗にある全てのカメラの線が漏電したかのように焼き切れたそうです」

愛は顔を上げる。

「……全て？」

「はい全てです。店員がメーカーに問い合わせた所、古いものなので不具合は生じやすくなっているそうなんです、それにしても全て焼き切れるのは作偽的なものを感じますね」

伊東の言葉に愛は考え込むように口元に手を当てた。

彼はまだ重要なことはあるのだと言うように続けた。

「その、柴田なんです、男と話をしている途中で突然奥の部屋に入ったと思うとすぐに出てきて灯油をまいたそうです。異変を感じてすぐに逃げ出したのが良かったのでしょうか、三階にいた主婦達は無事でした。逃げる際に彼女たちはこんな言葉を耳にしています」

伊東はそこで言葉を切った。

愛が興味を抱いたと言う風に視線を向ける。

その視線に頷き伊東は手帳に書かれた言葉を読み上げた。

「誰も、悪魔から逃げられない」

「悪魔？」

呟くと何かぞっとするものが背筋を這った。

まるで映画かドラマのような台詞だ。これから死のうとしている人間が口にするような言葉には到底思えない。しかも男は笑いながらそう言ったのだという。完全に狂っている。「薬物は」

「調べています。それより南条太一の方はどうでしたか？」

はずれ、と愛は両手をあげて見せた。

「今回に限っては偶然居合わせただけのようなね。同行していた看護士の女性も、orange猫の店員も怪しい行動は見なかったですよ」

「そうですか」

伊東は頷く。

子供を助けた勇敢な男が南条太一であったと聞いて、一度は関連の事件であると疑った。しかし、よくよく考えてみれば、今の状況で南条斎が太一の勝手な行動を許す訳がない。もしもこの事件に関わっていたとしても、経済力のある南条家だ、事件を監視するにしても太一ではなく金で雇った者を使うだろう。

裏を読めばわざと太一に目立つ行動を取らせ、疑いを逸らそうと
している可能性もあったが、南条斎に限ってはそんな浅はかな行動
を取るとは思えなかった。

彼ならばもっと上手くやる。

だからあの規模で超常現象の研究をしながら、これまでゼロ班が
介入することがなかったのだ。警察庁の超常現象捜査班では彼らの
動向を窺うことはあったが、注意を促す声は聞こえなかったし、あ
ったとしても強制捜査のできるような事柄は無かったのだ。

南条斎は研究者としても、責任者としても上手くやっている。

だから余計に南条太一の件だけが引かかる。

「伊東くん」

「はい」

「この火事は、連続放火事件とは無関係よね？」

伊東は少し考えてから頷く。

今までの放火事件は火元が曖昧ではっきりしないのだ。だが、今
回は男が灯油をまき、火を付けたという証言もとれている。

だとすれば、無関係と考える方が正しい。

「はい、理論上は」

「理論上？」

「ああ、すみません。そう考えるのが妥当です」

言ってから伊東は同じ事を言いましたね、と首を傾げる。

愛はちらりと笑う。

現場でこんな風に表情を緩めるのは珍しい。

伊東はきょとした表情で彼女を見つめた。

「どうかしましたか？」

「この火災、貴方が可能性あると思うのなら、ゼロ班でも調べまし
ょう」

「俺の勘で動いて良いんですか？」

「貴方の勘が鋭いこと自覚なさい。その方がずっと効率が良いわ」

「過信はしたくないんです」

「過信かどうか、私が判断するわ」

愛はきっぱりと言う。この自信がどこからくるのか伊東は知らない。伊東を生活環境課から引き抜いた時もこの調子だったのだろう。「眞由美を連れ戻してこの火災を調べるわ。あなたは柴田と南条斎の接点を調べて頂戴」

手帳を閉じて伊東は頷く。

「了解しました」

「……それと」

「はい？」

「今日も戻れないって、勇気に伝えてくれる？」

これは部下の伊東刑事ではなく、伊東猛に言っているお願い事だ。最初はそのくらいは自分でやれ、といちいち腹を立てていたが彼女の性格に慣れるのと同じでもう随分と慣れた。

「はい、確かに伝えておきます」

伊東は頷いて緊急で設置されたはしごを下りる。

彼女の息子も同じだが、仕事面では器用なのにこう言うところに不器用なのだ。誰かがフォローしなければとづくに破綻してしまっている親子だろう。

二人のちょっとしたずれを直すのは別に苦痛ではなかった。

伊東ははしごを下りながら小さく笑みを漏らした。

6 感傷

穏やかに眠る彼女を見ると時々不安になる。

息をしているか、心臓は動いているかと。身体が弱いとはいえそんなに心配することもないだろうと、自分でも可笑しくなるがそれでも不安なことには変わらない。

鈴華を失えば生きる意味を見失う。

南条の家の中で心を許せるのは太一と鈴華だけだ。父親も、顔もろくに覚えていない母親も、斎の中では両親という認識だけでしかない。親戚や従兄弟達と談笑したり、時に些細な喧嘩をすることはあってもそれだけなのだ。

本当に大切に想っているのは弟妹の二人だけ。

斎はベッド脇に座り、鈴華の髪をそっと撫でた。

「イツキ、帰ったのか？」

斎は顔をあげ指を口元に当てた。

太一は軽く頷いて声を潜める。

「11時までお前の帰り待っていたんだけどな、明日にしろって寝かしつけた」

「何かあったんですか？」

それ、と太一は鈴華の机を示す。

机の上には学校で配られたらしい藁半紙に印刷されたプリントが乗っている。授業参観と家庭訪問のお知らせの紙だった。

なるほど、と斎は溜息をついた。

兄妹の父親は今寝たきりの状態だ。時々調子の良い時はコミュニケーションがとれるほどに喋るけれど、そうでなければ殆ど口も聞かないし、意味不明な言葉を口にするこの方が多い。母親はいない。

両親に代わってこの家のことは長兄である齋が決めている。知らせ貰い、困って齋に相談しようと思ったのだろう。今までにも何度かあったことだが、授業参観はともかく家庭訪問に関しては気が重くなる。

南条家の家庭環境は複雑すぎるのだ。それを全て説明する必要はないが、担任と言うだけで土足で上がられるのはやはりいい気がしないのだ。忙しいことを理由に断れないこともないだろうが、やはりそれでも色々問題は出てくるし、鈴華にあまり寂しい思いはさせたくはなかった。

「このところ、なかなか話せる機会もありませんでしたからね、授業参観くらいは顔を出したいんですが」

「どうせまた忙しいんだろう？ 忙しいのは今更はじまったことじやねーし、参観に出るより一時間でも時間作ってやれよ」

「そうですね。ああ、言われると少し耳が痛い」

齋は複雑な気持ちで笑った。

授業参観は出られないだろう。出るとすれば幼い頃の齋がそうだったように、代理で坂上か太一が出ることになる。父親代わりでもあるはずの齋は、彼女に何もしてあげられない。

側に太一がいることと、不自由な生活をさせていないことだけが救いだ。もっとも、彼女の生活の三分の一は病院での生活になってしまっているが。

「色々悪かったな」

不意に太一が言う。先日のことを言っているのだろう。

齋は首を振る。

「いいえ、私は何も出来ませんでしたよ。むしろ久住君と岩崎君にお礼を言うべきでしょう。会ってきましたか？」

「いや、今日はごたごたしてそれほどじゃなかった」

「ごたごた？」

問うと彼はちよつとな、と誤魔化すように笑う。

こういう表情の時は話したくないと言うよりは、話しても仕方が

ないと言った意味合いが強い。聞けば答えるだろうが斎はそれ以上は問わなかった。

「明日、会ってくるよ」

「そうですか。私もいつかちゃんとお話したいですね」

「当面は自粛しているよ。そうでなくてもお前は警察に目を付けられている。久住明弥はともかくあっちの少年の母親は刑事だ。全部筒拔けるからな」

「肝に銘じます。もっとも目を付けられているのは貴方も同じですけどね？」

彼はちよつと顔をしかめる。

「俺は良いんだよ。どっちにしたって連中がその気になれば俺はすぐ、捕獲、されるんだ。泳げるうちに泳いでおくつもりだ」

警察の中では当然太一をそのまま禁固にするという意見もあっただろう。人狼という事は極一部の刑事しか知らないという事だったが、それにしたってそのまま放っておくとは思えなかった。

おそらく、あの女刑事の考えだろう。太一を野放しにすることで、斎と接点を持つておきたいとでも考えた。太一もそれを把握している。彼女は、直接的には言わなかったが斎が何か企んでいるのではないかと疑っていることを隠そうとしなかった。それは自信か、それとも作戦か。

どちらにしたって厄介な相手に目を付けられたものだ。

「ただ」

「ただ？」

「久住明弥と直接話出来るの、最後かも知れないな」

それは確かにそうかもしれない。

あれだけ危険な目にあったのだ。いくら彼が優しい性格でも、太一との接触は避けたいと思うかもしれない。

そうなってしまうば太一は彼と積極的に関わらなくなるだろう。

太一は身長だけでなく体格がいたために巨漢という印象を受ける。発達した筋肉や、地毛である赤毛も要因だろうが、彼を見た殆どの

人間は怖いという第一印象を抱く。そのため勘違いもされやすいが、彼は人から「嫌われる」と言うことを敏感に感じ取る。

そういう性癖があるならともかくとして、嫌われていると分かっている人間に近付きたがる人はそういない。まして繊細な彼が傷つかないはずがないのだ。

この件では久住明弥も、太一も責められない。

「太一、ちょっとこっちに来てくれませんか？」

「ん？ 何だ？」

「ここに屈んで下さい」

「？」

太一は不審そうにしながらも言われたように斎の前にしゃがむ。

斎は太一の頭をくしゃくしゃにかき混ぜた。

「イツキっ！？ 何を……！」

「貴方はよく頑張りました、太一」

「……」

「子供の頃、私が落ち込むとあなたはこうしてくれましたね。今も貴方だけは私のことを叱ってくれる。それが、どれだけの支えになっているか、貴方は知っていますか？」

太一は苦笑をする。

泣きそうになったのを隠すのを失敗したような苦笑だった。

「何だかお前に言われると気持ちが悪いな」

「夜は感傷的になるものなんですよ」

「……じゃあ、感傷ついでに言うけど」

「はい？」

「鈴華は、大丈夫だよな？」

すぐに答えられなかった。

もちろん、と言いたい反面、斎自身も彼女のことには不安がある。絞り出すように彼は言う。

「……そのために、私は今もなお研究を続けているんです」

あの刑事が‘禁忌’と呼んだ力の研究を。

「私に出来るのは、それに近付く事だけなんです」

「お前、医師免許もっているだろう？」

意図が読めて斎は首を振った。

「発達した医学は、彼女を見捨てる結論を出しますよ」

「……」

「私は、諦めたくないんです」

彼女のことを。

いや、認めたくなかったのだろう。

だからまだこだわっているのだ。

彼女のことに。

太一は立ち上がりうつむいた。くしゃくしゃにして下ろされた前髪が彼の表情を隠した。長い付き合いだからどんな表情をしているか分かる。

そして、次に来る言葉も。

「…………俺、寝るよ」

「はい、お休みなさい」

「イッキも早く寝ろよ」

「はい、そうします」

斎は彼の背中に微笑んで見せた。

※ ※ ※

終電を過ぎ行き交う電車もなくなった線路の下を走る通路。

暗がりから人の呻き声が響く。

「何だ、もう終わり？」

少年はどこか愉しそうに言った。

西ノ宮高校の制服を来ている少年は自分の足下に転がっている、同じ高校の制服を来た少年をつま先で蹴飛ばした。

「強がっている割に、意外とあっけないんだね、安藤くん」

ごほ、と安藤が血を吐き出した。

彼のすぐ側には、何人もの少年達が道路に伏している。荒っぽい息をしているものや、腕や脇腹を痛そうに押さえている者もいる。その中からコンクリートの壁に寄りかかっていた馬場が相手を憎んだかのような声で唸った。

「……井辻いつ」

よせ、と安藤が止めるが、その声は言葉にならずひゅうと風を切る音しか出なかった。

馬場は片腕を押さえながら井辻を押さえ込もうと飛びかかった。体格はそれほど変わらない二人だったが、井辻よりも馬場の方が体力も腕力もある。普段ならば井辻が押さえ込まれて終わりだ。

しかし、井辻は余裕があるという風に微笑んだ。

「馬場の‘バ’は馬鹿のバだね？」

見下したように彼は言った。

刹那、飛びかかってきた馬場の身体が見えない力によって後方に飛ばされる。壁に叩き付けられた彼の身体はまるで固定されたように宙で停止した。

「うあっ……あ？」

馬場は苦しそうに喉元を押さえた。

止めるんだ、と安藤が吐き出す。

それを冷たい目で睨んだ井辻は、すぐさま馬場に視線を戻す。

「俺は優しいから」

彼は無邪気に笑う。

「殺したりしないよ。だけど、分かっているよね？」

愉しそうな声に、脅すような声音が混じる。

「……誰にも言うなよ、二度と俺に逆らうな」

「う……あ……？」

ばき、と何かが折れる音が聞こえた。

「っ！！」

ぼとり、と馬場の身体が地面に落ちる。

一拍置いて、断末魔のような悲鳴が響く。

その様子を見て、井辻が高く笑う。

「あはははは、ざまあみろ！」

その声は狂ったように夜の闇の中で響き渡っていた。

深い、夜の闇の中に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6838w/>

ウィッチクラフト Ain Suph Aur

2011年10月14日01時58分発行